二〇一五年十一月八日

小川未明フォーラム ―今よみがえる未明の愛―　実施報告

プログラム

1　基調講演　「いわさきちひろと小川未明」

美術・絵本評論家　松本　猛

2　パネルディスカッション

コーディネーター　武蔵野大学教授　宮川健郎

パネリスト　上越教育大学教授　小埜裕二

パネリスト　早稲田大学教授　千葉俊二

パネリスト　児童文学作家　杉　みき子

パネリスト　画家・陶芸家　堀越千秋

パネリスト　松本　猛

1　基調講演「いわさきちひろと小川未明」

松本　猛

一、『若い人の絵本』シリーズ

『赤い蝋燭と人魚』（図1）は、いわさきちひろが最後に描いた本ですが、完成せず、結局未完で残されました。表題作の『赤い蝋燭と人魚』の他に何作か描く予定でしたが、『赤い蝋燭と人魚』も、何点かを描いた時点で体調が悪化し、執筆を続けることができない状態になりました。その後、回復することなく亡くなりましたので、わたしと編集者で、残された絵と習作からこの本をまとめて遺作として出版しました。この本は童心社という出版社から出されている『若い人の絵本』というシリーズの一冊として企画されました。

図１　『赤い蝋燭と人魚』表紙

この『若い人の絵本』シリーズは、一九六六年に、いわさきちひろがアンデルセンの『絵のない絵本』という本を出したことがきっかけになって始まります。それまで童心社という出版社は、紙芝居や絵本や児童文学を出版していた出版社です。それがこの『絵のない絵本』をきっかけに、大人向けの、若い人向けの、見開き2ページ毎に1点の絵が入る新しいスタイルの「絵本」を生みだします。

なぜ、新しい「絵本」シリーズに踏み出したのかについて少しお話します。いわさきちひろは、画家としてスタートする若い時から毎年のようにずっとアンデルセンを描き続けてきました。ご存じの方も多いと思いますが、アンデルセンは童話だけでなく大人向きの文章も書いています。『絵のない絵本』というのは、月が画家に語った三十三話の話をまとめた連作短編集です。子どもの本の中では、その中から子どもにも理解できそうな

松本　猛

図２　煙突掃除の子ども『絵のない絵本』

話だけがピックアップされて、紹介されてきました。ところが、実は、たくさんの悲しい大人向きの文章があり、いわさきちひろはそれも含めて描きたいという思いをずっと抱えていました。

　そのような思いもあって、アンデルセンの故郷であるデンマークのオーデンセンまで出かけて行き、スケッチをたくさん描きました。童心社にとって、いわさきちひろは一番売れっ子の絵描きでしたので、いわさきちひろが描きたいと言っているものを出さない訳にはいかない。『絵のない絵本』の全編を入れた本を出すとなると、子ども向きにはなりませんので、結局、若い人向けのこのシリーズを作ることになりました。『絵のない絵本』ではこういう絵（図２）を描いています。これは、煙突掃除の子どもの話です。アンデルセンは、「マッチ売りの少女」もそうですが、児童労働をテーマに結構書いています。アンデルセンの母が「マッチ売りの少女」のモデルだったという説もありますが、その時代をアンデルセンはリアルに書いていました。この絵は、暗く細い煙突から出た時の少年の感動を絵にした作品です。煙突掃除というのは体の小さい子どもでないと煙突の中に入れませんので、児童労働としては一番重宝されていたものでした。アンデルセンは働く子どもを確実にテーマとして書いていました。

　これは、玉座で死んだ少年の話を描いた絵（図３）です。フランス革命の時代にこの子の母は占い師から、「あなたの子供は、きっと玉座で死ぬでしょう」と言われ、それは王様になることかと思って喜びます。しかし、実際は、フランス革命に少年は参加して、玉座の所で殺されて死ぬということになります。このようなシーンは、いわさきちひろが描きたかった、ドラマティックな場面です。歴史の背景を感じさせながら一人の少年の人生みたいなものを一枚の絵の中に描きこみたかったのでしょう。

　この絵は、せむしの道化師がある女優に恋をするのですが、想いは通じないまま、女優は亡くなります。その日彼はいつもに倍して道化を演じ、人々を笑わせたあと一人、女優の墓をたずねます。この絵はその場面です。（図４）。こうした話は、いわゆる子どもの本に

図３　玉座で死んだ少年『絵のない絵本』

図４　せむしの男『絵のない絵本』

図５　『花の童話集』

図６　『たけくらべ』表紙　美登利

は入らない世界のお話でした。『若い人の絵本』シリーズの次の本は宮沢賢治の童話を集めた『花の童話集』です（図５）。

これは、樋口一葉の『たけくらべ』の表紙の絵です（図６）。この絵は、一葉の精神性と主人公の少女、美登利の精神性を重ね合わせて視覚化したのではないかと私は思います。その他にもこの『若い人の絵本』シリーズの中では、例えば、『わたしがちいさかったときに』という原爆で被爆した子どもたちの詩や作文に絵を添えたものや、『愛かぎりなく』という本を作ったりします。これは、ネクラーソフというロシアの詩人が書いた長編叙事詩です。「デカブリストの妻」をテーマにしたものですが、デカブリストというのは、十二月党員といいまして、ソビエト革命の前の十九世紀の前半に農奴制に反対し、人権を守ろうとして、ロシア帝国に対して蜂起をした青年将校たちのことです。彼らは捕まって殺されたり、シベリアに流刑されたりしますが、その妻たちの愛の物語です。また、万葉集を描いたりもしています。『若い人の絵本』は一九六六年の『絵のない絵本』から毎年作ってきました。

そして、七一年に先ほどの『たけくらべ』を描いた後に、次に何をするかを考え、未明の『赤い蝋燭と人魚』の他何篇か描こうということになります。そのころから体調を崩すなどし、仕事を処理しきれず、取りかかるのが遅れます。『赤い蝋燭と人魚』は七三年の秋にようやく制作を始めた作品でした。

このシリーズは、基本的にいわさきちひろが何を描くかを選ぶことができるシリーズでした。つまり『絵のない絵本』に始まって色々な作品は、ちひろがそれまで興味があった世界をひとつひとつ毎年選んで描いていったわけです。これはちひろ自身が好きな文学であると同時にもうひとつ要素があったと思っています。それは、若い人に読ませたい作品だったということです。簡単にいえば、私に読ませたい本だったのです。このシリーズが始まった頃、私は十五歳か十六歳ぐらいでした。なぜ私に読ませたかったかがわかるのかというと、毎年企画に上がる本を、私に先に試し読みさせたのです。「今年これを出そうと思うけど、どう思う?」と言って、私が「結構いけるんじゃない、面白いんじゃない。」と言うと、それが実際、本になる。こうなると私は認められたような気にもなるし、やはり、質の高い作品ばかりでしたから、面白くなって一生懸命読むわけです。今から思えば、私に読ませたい、あるいは私と同世代の子どもたちに読ませたい本を出版したかったのだと考えています。

そしてもう一つは、自分自身が視覚化したいという世界がその本の中にあることがポイントだったと思います。先ほどの一葉の精神、あるいは美登利という女の子の気の強い、将来花魁にならざるをえないという運命を背負った子。その子を描くのに気品と意思の強さを表現したいと思ったの

でしょう。そして髪の後ろにあるわずかな闇は、美登利の後の人生を暗示していると考えられます。そういう複雑な世界を描きたかったのです。これは木や花の心になって語る宮沢賢治という人間をどう描こうか、ということにもつながります。そう考えていくと、いわさきちひろは未明という人の文学を私に読ませ、一葉や賢治と同じように、未明という人物に触れさせたかったのだと思います。

これが当時アトリエでのいわさきちひろ（図7）。これは復元した時のアトリエです（図8）。この本棚の上、鳩のあるところの右側に注目してください（図9）。ここにはアンデルセンの全集に並んで、『小川未明幼年童話文学全集』（集英社、一九六五～六六年）があります（図10）。全八巻ですが、その中の第四巻『みなとについた黒んぼ』の口絵や挿絵をいわさきちひろが描いています（図11）。表題作以外にもたくさん作品が入っていますが、ちひろは、この時にかなりたくさんの未明の童話を読んでいると思います。

図７　アトリエにて　1970 年前後（50 歳頃）

図８　アトリエ

図９　アトリエの本棚

図 11　『小川未明幼年童話文学全集』
第四巻『みなとについた黒んぼ』

図 10　『小川未明幼年童話文学全集』

二、ちひろの時代背景

未明という人にいわさきちひろが魅かれた理由は、作品がいいと感じたことはもちろんでしょうが、それだけではないと私は思っています。なぜ、ちひろは未明を選んだのか。未明はアンデルセン、宮沢賢治と共通する部分がたくさんあるのだろうと思います。そのような文学の持っている質が、いわさきちひろの好むものに近かったということは事実ですが、それと同時に、未明という人にある種の親近感を感じていたのではないかと思います。というのは、今ここに表1を出しましたが、未明は明治十五年（一八八二年）の生まれです。一八八四年にいわさきちひろの父、倉科正勝が生まれ、母、文江は一八九〇年に生まれます。正勝は絵も大変上手で、ちひろは女学校までかなわなかったと言っています。そして、若いころは文学で生きようと志していた人です。雑誌に小説や俳句や短歌も発表していましたが、作家になるという思いは叶いませんでした。正勝という人は竹久夢二とも同世代です。そして、武者小路実篤や志賀直哉らが作った雑誌『白樺』という同人誌がありますが、この同人たちも同世代です。白樺派は学習院の仲間たちが中心になって作ったものですが、正勝はその人たちの運動にはかなり関心を持っていたと考えられます。未明もそうでしょう。未明や正勝の青春時代は、自由主義や社会主義・人道主義が大きく盛り上がっていた時代です。インテリの人達の中では当然そういう考え方が話題になるわけですから、それを無視する訳にはいかない。おそらく文学に関心があり、絵も好きだった未明も正勝も雑誌『白樺』を見ていたと思います。その理由としては、同世代の文学者らの雑誌であるというだけではなく、雑誌『白樺』は文学の同人誌でありましたが、もう一つ重要な側面を持っていて、西洋の美術を紹介する一番新しい雑誌だったからです。絵に興味がある人々にとって、ヨーロッパは今、どんな絵が認められているのかを知るには『白樺』を見る以外になかったのです。印象派も、ゴッホやセザンヌやロダンも『白樺』を通して紹介されていきました。同時にベートーベンの紹介やトルストイの紹介もこの雑誌を通して行われていました。

つまり文学や美術に関心を持っていた人たちは、この雑誌を避けて通ることはできなかったのです。そこで語られているのは、社会主義思想にもつながるような人道主義・アナーキズムなどの部分もありました。

海外のこの時代に目を向けますと、例えばファッションで言うとココ・シャネルという人や、ピカソとかアポリネールと親しかったマリー・ローランサンという絵描きは未明が生まれた翌年の一八八三年の生まれです。つまりヨーロッパの女性たちのなかに男性に伍して活躍する人々が登場してきた時代です。シャネルはコルセットを女性の服装から取り払う人ですが、

1882	**鈴木三重吉**（作家・『赤い鳥』創刊者）　**有島生馬**（画家）**小川未明（作家）**
1883	志賀直哉　高村光太郎　朝倉文夫（彫刻家）　和田三造（画家）
1884	**倉科正勝（父）**　**竹久夢二**　山村暮鳥　石橋湛山　　東條英機　山本五十六
1885	武者小路実篤　**北原白秋**　若山牧水　柳原白蓮　**大杉栄**
1886	石川啄木　**平塚らいてう**　長沼智恵子（高村光太郎の妻）　**藤田嗣治**　川島芳子 山田耕筰　谷崎潤一郎　萩原朔太郎
1887	バーナード・リーチ　小寺健吉（画家）　**中山晋平**　荒畑寒村　小糸源太郎
1888	里見弴（有島生馬の弟）　梅原龍三郎　**高畠華宵**　菊池寛　**岡本帰一**
1889	柳宗悦　木村壮太、
1890	**岩崎文江（母）**　清沢洌　**坪田譲治**　杉田久女　植村環　東山千栄子　岸田國士
1891	岸田劉生　恩地孝四郎　**清水良雄**

表１　明治 15 年（1882）以降出生した主な人物

働ける女性たちをサポートしようとするファッションを作っています。女性の人格を認めていこうとする動きが出てきた時代です。日本でも平塚らいてうや柳原白蓮は同世代の女性です。

この時代、自由恋愛などは珍しかったわけですが、らいてうや白蓮もそうですが、文学者や知識人の間では恋愛が結構ありました。白樺派のグループには高村光太郎も入っていますが、光太郎と智恵子の大恋愛は有名です。未明も大恋愛のうちに結婚しました。

いわさきちひろのお父さんの正勝も、太田喜志子という女流歌人を若山牧水と争って敗れたという話が残っています。結局は、見合い結婚をしていわさきちひろが生まれるわけです。正勝は長野県の中農の出ですが、一九〇四年に一九歳で海軍に志願して、軍艦で世界を3回くらい回っています。その時に英語の必要性を感じ、海軍をやめて英語学校に通い、その後、東京工科学校に行って、建築技師の資格を取り、最終的に陸軍の築城本部に技師として入ります。陸軍で軍属として仕事をしながら文学を志しますが、なかなか思うようにいきませんでした。

いわさきちひろは父親から大きな影響を受けています。ちひろは、おそらく女学校時代に岩崎家の書棚にあったはずのたくさんの画集や雑誌『白樺』を見る中で、色々なことを考える、感性の豊かな少女になっていったはずです。

いわさきちひろが生まれたのは一九一八年です。一九一八年というのはどのような年かといいますと『赤い鳥』が創刊された年です。そしてそれより少し前に婦人之友社からは『子供之友』という雑誌が出ています。一九二二年には『コドモノクニ』という子どものための絵雑誌が出てきます。『コドモノクニ』に未明は五十篇の童話を発表しています。『コドモノクニ』は幼いちひろの愛読書でした。つまり、いわさきちひろが未明の作品と出会うのは、小学校に入るか入らないかくらいのころ『コドモノクニ』で出会うのです。そして、思春期のものを考えるようになっていく時代には、『白樺』などを通して文学や美術に目を開いて行くのだと思います。

一九一〇年に大逆事件が起こりました。この大逆事件は、幸徳秋水事件ともいわれていますが、天皇を爆弾で殺そうという企画があったということで、当時の無政府主義者や社会主義者を一網打尽にして、でっち上げで捕まえ、たくさんの人たちを処刑した事件です。

これに対して、小川未明はとんでもないことが起こったと思いますが、多くの文学者にもこの事件は大きな衝撃を与えます。大逆事件の弁護をした平出修という人は文学者でもあり、弁護士でもあったため、彼らを弁護します。この上越市高田の平出家の娘と結婚していた人でもあります。大逆事件は当時の法律に照らしても、とんでもないでっちあげ事件で、無実の無政府主義者や社会主義者を死刑にしてしまう恐ろしい事件だったのです。この時、与謝野鉄幹や徳富蘆花などが当時の首相にまでこれはおかしいと談判しています。そのような気運の中で文学者たちはものを考えざるを得なかったのです。平出修の友人でもあった石川啄木は大逆事件についての文章を書いたり、社会主義への傾斜を強めたりし、また、永井荷風はこの事件に対して、自分が全く何もできないことを恥じ、「江戸の戯作者のなした程度までひきさげるに如くはないと思案した」と書いています。文学者は、この事件をきっかけにものを考えざるを得なくなっていきます。

現代で言うと福島の原発事故の後に、多くの作家たちが原発や文明、自然と人間の関係などについて考え、書かざるを得なくなったのと似ているかもしれません。

そういう社会状況の中で、いわさきちひろが生まれる頃は、進歩的なものの考え方をする一つの大きなうねりと、それに対して、軍部を中心に、朝鮮併合を進め、日本を強くしなくてはならないという国家主義的考え方のうねりが拮抗してくる時期です。現代とちょっと似ている気もします。その中で未明など多くの文学者たち、アーティストたちはリベラルな動きの中へ入っていきます。しかし、ご存じのように歴史はその後、社会主義思想はもちろん、自由主義的な考え方も押さえつけられていきます。それは治安維持法が強化され、一九三三年に小林多喜二が虐殺されると、ます

ます顕著になっていきます。詩人、谷川俊太郎氏の父、谷川徹三は当時の日本の知識人を代表する哲学者でしたが、谷川俊太郎氏に直接お話を聞いたところによりますと「父は家の中では、『今の軍部はひどいものだ。内閣はあまりにひどいじゃないか』と、ぶつぶつぶつぶつ言うけれど、一切それは外では言えなくなった。なぜ言えなくなったかというと、言うとその途端に牢獄に引っ張られて拷問に合う。そういう状況がみえてきた」というわけです。一九三三年の小林多喜二の虐殺というきっかけもありますが、文化人、知識人たちのなかには自主的に国家主義に傾いていくひとたちが急速に増えていきます。白樺派の人たちの多くもそうでした。どんどん戦争が進むに従って出版の自由もなくなっていきます。文筆に携わる人は、戦争協力をしなければ生活の糧も失うことになりました。それは絵描きも同じです。戦争画を描かない絵描きたちは画材の配給もなくなっていきます。藤田嗣治もそういう画家の一人です。未明もおそらくその波の中にのみ込まれていったのでしょう。

この時代、いわさきちひろの父親である正勝も、一九一八年当時はシベリア出兵なんか行きたくないとぶつぶつ言いながらも、だんだん国家主義的な考え方に染まっていきます。母親の文江も女学校の教師をしていましたが、そののち大日本女子青年団の主事になって、大陸に花嫁を送り出す中枢の仕事をするようになります。ちひろは、戦争の足音が近づく中でも豊かで文化的な生活をしています。子ども時代には『コドモノクニ』もたくさん読み、女学校時代は油絵を習い、音楽や映画やスポーツを楽しむ生活をしながら成長します。

そういう環境の中でちひろという人は文化的感性は豊かになっていきますが、社会を見る目は持ち得なかったわけです。そして、未明もおそらく苦悩を背負いながらも戦争協力をせざるをえなくなって生き続けます。

三、ちひろと未明

ここでいわさきちひろと未明のものの考え方について考えてみたいと思います。例えば、未明の思想とは、空想的社会主義、理想主義、人道主義などの考え方に近いと言われています。たとえば『眠い町』は文明に対するものすごい批判を含んでいます。『野ばら』には戦争とは何か、という問いかけがあります。では、ちひろという人はどういう風に考えていたのでしょうか。ちひろのエッセイ「銀杏の落葉　アカシアの木　―かなしい犠牲者たち」の冒頭と最後の部分を紹介します。

「十一月になるとある日突然、目がさめるように庭が明かるくなる。銀杏の葉が真黄いろになって一せいに庭に散り敷くからである。それは雪の朝の感動に似た、秋の日の一ときの思いがけないよろこびである。けれどこの黄いろい華麗なよろこびを去年も今年も、多分一昨年もあじわっていない。銀杏の葉が色づきはじめたかなと思ううちにまだ緑いろがのこっているというのに、茶色に枯れてお隣からふってくる欅の落葉にまじっていつとはなしに散ってしまうのである。裏にできた新青梅街道に車がたくさん走るようになったせいであろうか。」

この時代、光化学スモッグが我が家の近くで頻繁に発生するようになりました。こうした問題に対して、いわさきちひろは後半でこのように書いています。

「思えばうちの金木犀の花だって、今年は咲いたと思ううちに香りもださずに散ってしまった。ここはベトナムのような直接的戦場ではない。（※当時ベトナム戦争が非常に激しかった時期。）国会の自民党の強行採決だってテレビの中のできごとだと思ってしまえるような、郊外のささやかな自然のなかなのに。銀杏もアカシヤも金木犀もみんななんというかなしい犠牲者（木）であることか。もちろんこの地球上に人間が安心して暮らせるところがあるなどとは、私もずっと前から思わなくなっていたけれど。」

これは文明というものに対してのいわさきちひろが疑問符を呈している言葉だと思います。

次に平和の問題について、いわさきちひろはどのように考えていたのかを紹介します。

「青春時代のあの若々しい希望を何もかもうち砕いてしまう戦争体験があったことが、私の生き方を大きく方向づけているんだと思います。

平和で、豊かで、美しく、可愛いものがほんとうに好きで、そういうものをこわしていこうとする力に限りない憤りを感じます。

今の世の中、いろんなものが失われていってるでしょう。とても素朴なんだけれどたいせつなもの、それが絵本の中にはあるんです。それを何とか表現していってお母さまたちにも見てもらうのが、わたしの生きがいです。」

これはインタビュー記事ですが、どういうことを語ろうとしているかと言うと、本人から私は聞きましたが、自分のまわりから戦争中はだんだん色彩がなくなっていったと述べています。色がなくなっていき、そして例えばフォスターの歌をくちずさもうものなら、なんでそんな外国の歌を歌うんだ、って文句を言われる。そういう状況だったと、聞いています。

ここでは「とても素朴なんだけれどたいせつなもの、それが絵本の中にはあるんです。」と、絵本という言葉を使っていますが、絵本を童話と読み変えてもいいのかもしれません。絵本や童話の中には素朴ではあるが、大切なものが入っている、ということをいわさきちひろは言いたかったのだろうと思います。

なぜ、ちひろが戦後、子どもの本の世界に入って行ったのかというと、アンデルセンも好きであり、宮沢賢治も好きでした。そしてまちがいなく未明も好きだったのですが、その世界の中に自分の語りたいものとの共通するものを見出していたからだと私は思います。そう考えると、実は、未明とちひろの感覚は近いところにあったのではないかと思います。

次は「子どもによませたいこの一冊」の引用です。

「アンデルセンの『絵のない絵本』、私は前からこの話が好きだったのですが、先日さしえを描きあげたばかりなので、なお印象がふかいのです。貧しい屋根裏住まいの絵描きの青年に、月が毎晩訪れて語ってくれた物語です。

ガンジス川に灯を流して愛する人の生死を占う少女の話、フランス革命のとき玉座で死んでいった少年の話、パンにバターをたくさんつけてと祈る小さな女の子の話など、一夜から三十三夜までの短い話が集まっています。詩集のようにふとひらいて、一つ二つよむとまた味わいがふかいと思います。いまから百何十年も前にかかれたものですが、人の世の悲しみや真実がかかれていて、それは今の世も全く同じです。アンデルセンは神を信じていた人ですが、神の力ではどうにもならない人の不幸をリアルにえがき出しているところも面白いと思います。中学校になって、大人の世界がわかりかけてきた少年や少女に一度は読んでもらいたい愛と詩の絵本です。」

この文章のアンデルセンを私は未明に置き換えても成り立つのではないかと思っています。というのは、「神の力ではどうにもならない人の不幸をリアルにえがき出しているところも面白いと思います。」という言葉がありますが、これは未明の童話の中に描かれている世界と重なると思います。必ずしもハッピーエンドでないなど、現実を見て多様な世界を未明は描いています。人々の悲しみを書いています。それは象徴化されている部分もありますが、貧しい子たちのどうにもならない悲しさが確実に描かれています。リアリズムが根底に流れている世界ではないかと私は思います。そう考えるといわさきちひろが未明を好きだったことは納得がいきます。ちひろは『赤い蝋燭と人魚』という本の中で未明を描こうと思い、その途上で亡くなってしまったわけですが、もし、もう少しちひろが生きていたらさらにたくさんの未明を描いていたのではないかと想像します。

いわさきちひろは宮沢賢治やアンデルセンについては、文章を結構書いています。しかし、未明については書いていません。それにはいくつか理由が考えられます。戦後未明批判を展開した古田足日や鳥越信という作家や評論家がいましたが、この二人とも実は我が家の近所に住んでいて、頻繁に遊びに来ていました。鳥越氏の石神井公園の自宅にお邪魔したこともあります。彼らはいわさきちひろより少し若く、家に来てごはんを食べていった人でもあり、論客でもありました。うっかり「未明はいいよ」と言うと彼らと戦うことになる。「これはまずい」と思ったのではないかと思います。それでもやはりいいものはいいということで、最後は童心社から本を出そうとして、そして残念ですが五十五歳で亡くなりました。いわさきちひろはそういう人でありました。

四、『赤い蝋燭と人魚』で描こうとしたもの

では、いわさきちひろが『赤い蝋燭と人魚』で何を描こうとしていたのか、それを考えたいと思います。

最初のページにある絵です（図12）。この絵を描くときにいわさきちひろはかなり体調が悪かったのですが、長野県の黒姫高原というところにちひろは山荘を持っておりまして、そこに滞在してこの絵を描き始めます。編集者を連れて行ってそこに籠って仕事をしますが、その時に「『赤い蝋燭と人魚』を描くためにはどうしても日本海を取材しないと描けない。」と言います。そして体調が悪いのを押して直江津まで出かけて行き、そこからタクシーで海岸線を走って、郷津、虫生海岸の前崎館という宿のところで気分が悪くなって休みます。その窓から日本海の海をスケッチしています。そしてそのスケッチをもとに描いたのがこの作品です。

なぜ、無理をしてでも現地に行かなければならないと思ったのかを少しお話します。宮沢賢治の本を描いた時もそうでしたが、ちひろは、賢治の見ていた現実の世界と、賢治が頭のなかで想像を広げて生み出した世界の

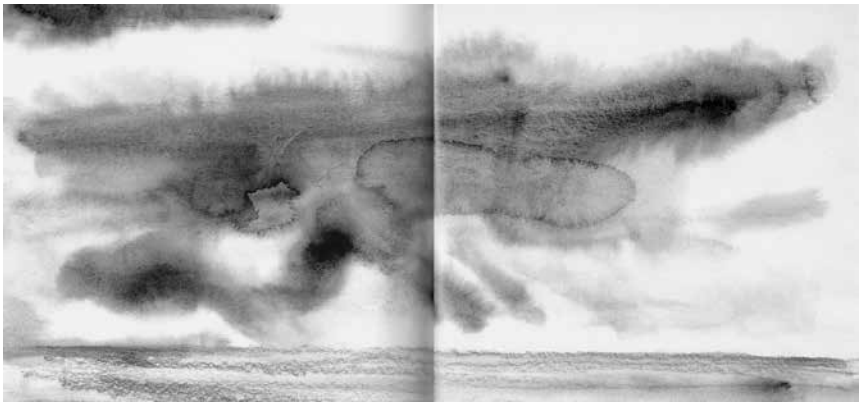

図 12 日本海『赤い蝋燭と人魚』

両方を描いています。賢治はこの風景を見ていて、この木を眺めて、あるいはこの花を見て、その木や花に人格を重ねて言葉を語らせた。ちひろはリアルな木や花を描き、次に人格化した木や花を描いたのです。つまり、まずは賢治の見た木や花を実感として掴みたかった。ちひろは岩手の自然を黒姫高原の自然に置き換えて、野山を歩きながら賢治を実感したのです。

未明の『赤い蝋燭と人魚』を描こうとした時に、これは私の個人的な感覚ですが、未明の文章の背後には音楽でいう通奏低音のような郷土の風土のイメージがずっと流れていました。それを絵描きとしては実感したかったのではないかと思います。それには現地に出かけて行って日本海の空気を感じたい、海を見ないとどうしても描けない、という意識があったのだと思います。

例えばこの荒れ始めようとしている海の手前に黒い岩が三つあります。真ん中の所に小さくて見えにくいのですが、人魚が後ろ姿で座っています（図13）。この三つ

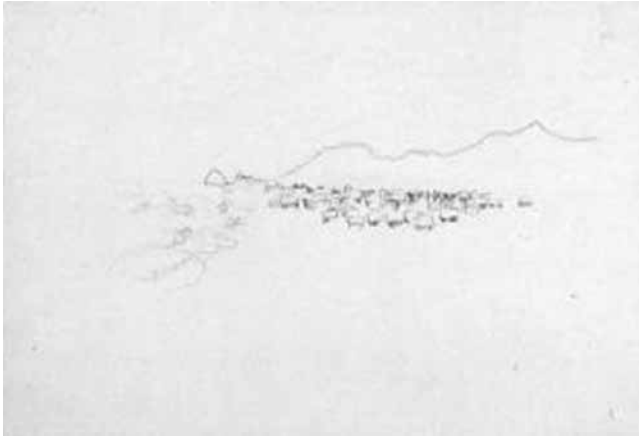

図 14　町並み『赤い蝋燭と人魚』

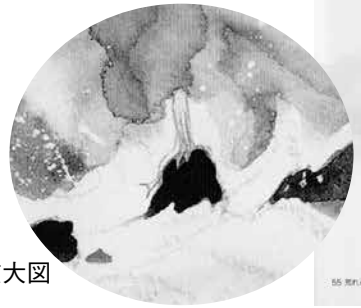

図 13　拡大図

図 13　岩に座る人魚『赤い蝋燭と人魚』

の岩は前崎館から見えていた岩です。実際の海をスケッチし、そこから夜の荒れた海を想像し、イメージを膨らませて、人魚をこの岩の上に座らせたのです。

この絵と同じ文章の描写はないのですが、文章を読みながら、文章に描かれていない海のイメージを膨らませ、描かれてない部分についてもイメージをつくり、どのように視覚化していこうかと画家は考えます。これは映画監督も同じですが、文学作品を映画にする時にどのような風景を背景に使うかとか、役者に誰を使うかと考えることと同じです。この人魚のお母さんの顔の表情はどのようにしようか、髪の毛の長さは、現れた時の着物は、などと、色々なことを考えながら描いています。こうした絵はちひろの未明解釈と言ってもいいと思います。

これは町のイメージです（図14）。おばあさんやおじいさんはどう描こうか、ということを考えます。これもいくつもの習作を描いています（図15）。ひょいとした首をのばしていくような、昔かたぎの江戸のおばあさんの雰囲気をどのように描くか考えています。おじいさんとおばあさんの二人の人格をどのようにしようか、どのような服装にしようか、それもちひろの中でイメージを膨らませています。

ちひろはアンデルセンの文章についてこのようなことも言っています。

「大人の文学のように非常に克明に文章が描写をしていると、私の想像力はしぼんでしまって自由な思いが広がらないんだ。むしろ、おばあ

図 15　おばあさん『赤い蝋燭と人魚』

図 17　絵を描く少女『赤い蝋燭と人魚』

図 16　人魚の少女『赤い蝋燭と人魚』

図 19　お宮『赤い蝋燭と人魚』

図 18　驚いて手を止める少女
『赤い蝋燭と人魚』

図 21　習作『みなとについた黒んぼ』

図 20　『みなとについた黒んぼ』表紙絵

さんでもおじいさんでも、とぼとぼ歩いているだけの雰囲気が書かれていると私のイメージは広がっていく」

未明の短い童話の文章は、ちひろにとってイメージを膨らませる事ができる豊かな世界だったのではないかと思います。

これは『赤い蝋燭と人魚』の少女の顔を描いたものですが（図16）、このデッサンもこの少女の後ろはどうなっているだろうか、ということを、どこかで意識しながら描いているような気がします。向こう側はどうなっているかということは、実はこの子の考えている世界でもあるわけです。その考えている世界がどうなっているのだろうか、それを瞳にどうやって語らせようか、色々なことを思いながらこの作品を描いていたのではないかと思います。これは少女が蝋燭に絵を描いている場面ですが（図17）、絵が好きな女の子の姿には、自分自身を重ねているのかもしれないと思います。

これも習作の中の一つです（図18）。香具師が人魚の娘を買いに来た瞬間の表情ではないかと思います。これは最終的に仕上がらないで終わってしまった作品ですが、心の一瞬の動きというのを視覚に留めたいと思ってこの作品を描いたのではないかと思います。これは本当に仕上げてもらいたかった作品ですが、このままで止まりました。

これはお宮です（図19）。虫生海岸の前崎館という旅館から裏山へ少し上がったところにこのような雰囲気のお宮があります。これは私が、母が死んだ後に取材に行って宿の人にこの絵を見せたところ、裏山のお宮だというので、ここもスケッチしたのだろうと思っていたのですが、実際はこの時体の具合が悪くてそこまでいけなかった、ということでした。イメージの中だけでこういうものを描き出していたというのは絵描きの感覚としてもすごいと思いました。

これは『みなとについた黒んぼ』です（図20）。お姉さんをどのように描こうか、弟をどのように描こうかとイメージしていると思います。

これは使われなかった作品です（図21）。南の島で踊っているお姉さんと弟のイメージ。それをこのように描いています。南の島で踊っているという言葉は我々に色々なイメージを膨らませて読む人の側にゆだねている世界です。絵描きはそれを形にしてみたい、と思ったのではないかと思います。

実は、いわさきちひろという人は子どもと同じように花もたくさん描いています。花に自分の思いを重ねて描くことがあります。これは木の葉の精を描いた絵（図22）ですが、くるくると舞う木の葉の姿に、その上に乗って木の葉を自在に操る木の葉の精を見つけたのでしょう。この絵には何枚もの木の葉と子どもたちが描かれていますが（図23）、木の葉がカサカサ、カサカサ、風に舞って動いているのを見たときにおしゃべりをしているみたいだと、感じたのでしょう。いわさきちひろという人はそのとき、この絵のように木の葉と子どもを重ねて一枚の絵に仕上げることがあります。

この枯れ葉の中で白く描かれ、たたずんでいる少年は、半分ちひろ自身ではないかと思います（図24）。木枯らしの中に立ちながら、自分自身が透き通って行くように感じ、空気の中の一部になってしまうようなイメージで描いた作品のように思います。

緑の草むらのなかの子どもたちを描いたこの絵も（図25）先ほどの絵もそうですが、子どもたちにほとんど色が入っていません。子どもたちに色が入っていないということはどういうことか、まわりの黄色い花には、わずかに紫もありますが、色が入っています。これは風が吹き始めてさわさわと揺れていて花たちがおしゃべりしているみたいだ、と感じたちひろが、花の心を子どもたちの姿に変えて描いたのだと思います。白抜きで描かれた子どもたちは花の化身なのでしょう。

『バラにかくれる子ども』というこの作品を見ても（図26）、例えば女の子の帽子はこのバラの色と同じです。男の子の黄色いシャツは別のばらと同じです。バラを人間にするとこのような感じだよ、というメッセージを込めて描いているのではないかと思います。

賢治の『花の童話集』も実は同じように描いています（図27）。これは

図 23　木の葉と子どもたち

図 22　木の葉の精

図 25　春の野原

図 24　枯れ葉のなかの少年

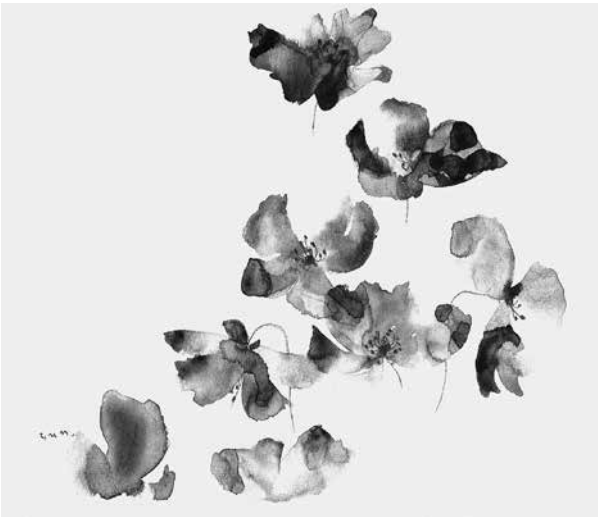

図 27　ひのきとひなげし『花の童話集』

図 26　バラにかくれる子ども

図 29　まなづるとダァリア『花の童話集』

図 28　『花の童話集』表紙

図 31　草むらの小鳥と少女

図 30　まなづるとダァリア『花の童話集』

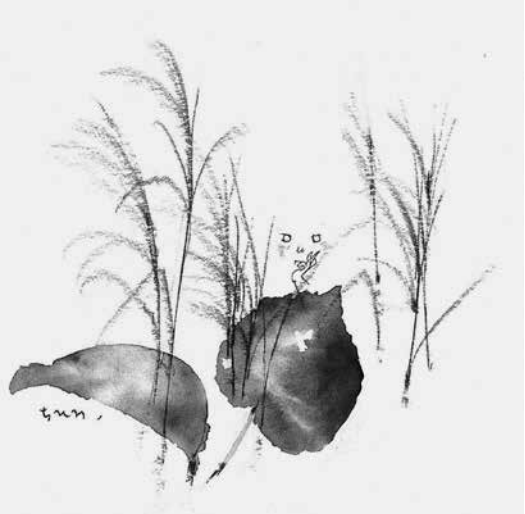

図 32　草むらのなかの子ども『花の童話集』

擬人化していないひなげしのそのままの絵ですが、表紙に描かれたひなげしには顔があります（図28）。こうした姿が宮沢賢治やちひろには見えたのではないかとも思われます。

これはダリアの花です（図29）が、この花の人格を描くとこのようになります、というのがこの絵です（図30）。このようにちひろは人間と植物を自由自在置き換えながら描いています。

草むらの中で小鳥に黄色い花を差し出しながら、なにか語りかけているようなこの絵は（図31）、ちひろの自画像のような気がします。小鳥や花などいろいろなものと会話をする、それがいわさきちひろの喜びでありました。

これは『花の童話集』の本の奥付ページに描かれたものです（図32）。私はこの絵は、ちひろが宮沢賢治という人はこういう目を持っているひとですよ、私も同じ目を持っていますよ、というメッセージを込めて描いた気がします。同じように小川未明という人もこういう目を持っていたのではないかと私は思います。そして、未明を描こうとして、その途上で、残念だけど筆が止まってしまったのが、今回の『赤い蝋燭と人魚』という本でした。この本では表題作の他に『野ばら』『月夜と眼鏡』『島の暮れ方の話』など何作か描く予定になっていました。そのいくつかの作品を思い浮かべるとどれも視覚的なイメージが豊かな作品です。ちひろが選んだものはファンタジーの世界と同時に視覚的に美しい表現があります。そのようなものを未明の中から選びだそうとしていたようです。もっと話したいことがたくさんありますが、時間が過ぎてしまいました。拙い話でしたが、いわさきちひろと未明との繋がりについて、今私が考えていることをお話しさせていただきました。どうもありがとうございました。

2 パネルディスカッション

宮川：このあとの進行は宮川が務めます。私は日本の児童文学を研究している研究者です。

今日は、基調講演の松本さんだけではなく、四人の方をお招きしています。こちらから順々に簡単に紹介させていただきたいと思います。

上越教育大学教授の小埜裕二さんです。先程松本さんのお話にも登場しましたが、鳥越信先生という著名な日本児童文学の研究者が少し前に亡くなったのですが、鳥越先生は未明の童話は千編あるといっていましたが、小埜先生は約千二百編あるとおっしゃっています。全集に未収録の童話とか、あるいは、初出誌などに発表されたままになっていた埋もれた童話などを発掘なさって、『小川未明新収童話集』というのを六冊も編まれました。千じゃなくて千二百だったということが小埜先生のお仕事でようやくわかりました。未明童話の全貌が見えてきたと思います。童話だけではなくて小説や随想のこともお調べくださって、未明研究の、今新しい道を開いてくださっている先生です。よろしくお願いします。

コーディネーター　宮川健郎

続きまして、千葉俊二先生、早稲田大学教育学部教授の千葉先生をお招きしました。未明は高田中学を出てから早稲田、当時は東京専門学校ですが、在学中に早稲田大学になります。早稲田の英文科の卒業生、坪内逍遥の弟子です。その早稲田大学の先生をお招きしました。千葉先生は、日本近代文学の研究者として著名でいらっしゃいますが、谷崎潤一郎が一番のご専門だと思います。今、全集を編集して、刊行されている最中です。中央公論新社です。同時に日本の児童文学のことも色々手がけてくださいまして、岩波文庫の『日本児童文学名作集』上下を編まれたり、やはり岩波文庫で『新美南吉童話集』も編まれたりしていらっしゃいます。よろしくお願いします。

お隣は、上越の方にはおなじみですが、杉みき子先生です。「わらぐつの中の神様」が小学校五年生の教材として長く教室で読まれています。日本中の子どもたちが知っている杉先生、上越の高田のお生まれで、未明の小学校の後輩にあたられて、未明を慕ってこの道に入られたと伺っています。杉先生からも後ほど話をいただきます。

それから四番目になりますけれども堀越千秋さんです。画家でいらっしゃいます。未明との関わりでいいますと、松本さんのお話にもタイトルが出てきた『眠い町』の絵本を出されました。今日はそのお話が伺えるのではないかなと思います。

それから松本さんにも登壇していただいております。よろしくお願いし

ます。

　最初は、小埜さんから堀越さんまで四人の方に十五分以内くらいで話題提供をしていただきます。その後、松本さんから他の方のお話を聞いて質問なさりたいこととか、違った意見を持っていらっしゃる場合もあるかもしれません。ご自分の話の補足があるかもしれませんが、一言ずつ松本さんから小埜先生に戻って付け加えていただいて、少し議論を掘り起こしていきたい。そんなふうに始めたいと思います。皆さんからもご質問、ご意見を頂戴する時間を取りますので、後でご発言いただければと思います。

　それでは小埜先生から。文学館の特別展「移動する未明―高田・早稲田・高円寺―」は今日でおしまいですが、「高田時代の小川未明」という題を頂戴しています。小埜先生に口火を切っていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

■「高田時代の小川未明」

小埜　裕二

小埜：はじめまして。地元で日本の近代文学を教えております上越教育大学の小埜裕二と申します。どうぞよろしくお願いします。今日は遠方からパネリストの方が来てくださっていますので、私の方からはフォーラムの話題を提供する事を目的に、出来るだけ簡潔にお話を申し上げたいと思います。テーマは「高田時代の小川未明」です。よろしくお願いいたします。

　最初に、私が考えます未明童話の魅力についてお話を申し上げます。それは、なにより子供の目でものを見、子供の心でものを感じること、それは何にもまして正しく、価値のあることだということを教えてくれるところだろうと思います。その目で世の中を見たとき、わたしたちは、人のためにつくす気持ち、ひろく愛する心、善いものや美しいものに憧れる気持ち、悪を憎む心、正義に味方する心、そうした純情の世界を生きる力を与えられます。

　先程の基調講演の中にありましたとおり、いわさきちひろも宮沢賢治も小川未明もいわば同じ目を持っていたのだろうと考えてよいでしょう。それが「子供の目でものを見、子供の心でものを感じること、それは何にもまして正しく価値のあることだ」と考えていた点だろうと思います。本日のフォーラムのテーマであります、未明の愛の内実は、今申し上げた一節にあろうかと思います。こうした見方が培われたのは未明が子供時代を過ごしたこの高田の地においてだったろうと考えます。

「童話を作って五〇年」という随筆で未明は次のように述べています。若干文章をまとめてあります。

「雪の深い高田の、寒い、貧しい士族屋敷に私は生まれた。その時分の生活とか、見たり聞いたりしたことが、いつまでも変わらぬ私の思想になった。」

　高田時代の暮らしが未明の文学の根底を作ったと言っています。さらに次のようにも言っています。

「田舎にいたときから貧富の差を見てきた。謙信や父の影響、日本外史を読んだことなどから、世道人心のために筆をとらなければならないと考えた。」

パネリスト　小埜裕二

未明の愛といった時には、広く愛するだけではなく、人のために尽くす、もっと言えば世道人心のために尽くす正義と関わるものであったといえるでしょう。

未明童話の原点が、子供時代のこの土地での暮らしにあったということをもう少しお話したいと思います。要点を三つに整理してみました。

「一つ目は、一人子であった未明が、子供時代に自然と対峙し、人の命のはかなさを感じ取った点。（未明は、人間の短い一生を社会のなかで輝かせようと考えました。）」

未明文学を読んでみますと自然と人事が常に対峙されて出てくるのがお分かりになるかと思います。

「二つ目は、貧しい人や病気の人を見て、どうしてみんな幸福でありえることができないのかと思った点。（人のいたみを自分のいたみとしました。）」

「三つ目は、北国・雪国の暗い、寂しい世界のなかで、なんとか希望を見いだそうとした点。（未明は暗い世界に馴染んだり、暗い世界に光を灯そうとしました。）」

未明の愛といった時には、とりわけ二つ目のポイントが重要になってまいります。北国人の我慢強さ、それから相互扶助の精神、名を譲り、労をいとわず、さりげなく人を助ける心、それは未明の血にも確かに流れています。

さてここで、相馬御風の文章を紹介したいと思います。未明の友人、糸魚川出身の相馬御風は明治四十五年に、まだ小説を中心に書いていた未明の文学について次の様に述べています。

「未明君の芸術の殆ど全部は、此の北国の自然の怖ろしい力に対する北国人の癒す事の出来ない哀訴の声である。」

ご存じのように北国を描いた未明小説は暗くて重いものです。目を覆いたくなるような苦しい生活の現実が描かれています。しかし御風はそれを次の文章のように、人間生活の根底を描いたもの、人間生活の意義を捉えたものと述べています。

「小川未明君の作品はそれを一個の芸術として鑑賞せんとするものに対して、或は多大の失望を与へる点があるかも知れぬ。けれども純粋な芸術的見地を離れて、それを一個畸形なる北国の蛮人が人間生活の根底を攫まうとして苦悶して行く心の歴史として味ふ時は、現代の作家の何人からも味ふ事の出来ない或る一種の人間生活の意義を痛感し得られると思ふ。」

ローカルなものが、ある種、人間生活の普遍的なものにまで突き詰められている、昇華されているというふうに御風は考えました。

この七月に、私は高田を描いた未明の随筆をまとめて一冊の本にいたしました。その仕事を通じて、未明がいかに高田の町を愛していたかがよくわかりました。未明が郷土の高田をどのように捉えていたのか、捉え方の変化を含めて次の四点にまとめてみました。

1、郷土の自然を思慕する時代
2、郷土＝超郷土の時代
3、郷土を通して社会変革を求める時代
4、帰るべき安息の地としての故郷時代

1から3までを簡単に説明したいと思います。

一つ目は郷土の自然を思慕する時代です。最初、未明は北国の自然の「力強い魅力」を繰り返し語っていました。おのれの「霊魂に眼鼻をつけてくれた」場所だと述べています。

二つ目は郷土の持つ暗さ、貧しさ、不遇の人生といったものを宿命と捉えていた時代です。御風の言うように北国人の哀訴の声を代弁しています。しかし、これを未明は人の持つ運命と捉え、人間全般の宿命とみなしました。郷土でありながら、郷土を超える普遍性を持ったものとして描き出しました。

三つ目は同じ暗い現実、痛ましい現実であっても、それは人の運ではなくて、近代の社会が作りだしたものだから（資本主義や金の力がもたらしたものである）、それを人間の手によって変えていこうとするものです。

今申し上げました二つ目の郷土＝超郷土の時代、この郷土の暗さを宿命と捉えた作品の例として、小説「紅い空の烏」を挙げておきたいと思います。また、三つ目に申し上げました郷土の暗さを社会の矛盾と捉えた作品の例としては「仮面の町」「死滅する村」という小説を挙げておきたいと思います。美しい郷土に暮らす人々がいつのまにか暗い生活を余儀なくされ互いにいがみあうようになります。人心の軋みが生じた高田を仮面の町、死滅する村と言っているわけです。

未明の童話に「眠い町」がありますが、ここには美しい町が眠い町となり、やがて眠い町でさえなくなる近代化の流れをたどりつつ、その流れを押し返そうとする少年ケーが登場します。未明は社会の厳しい現実を主に小説に描き、童話ではそれをふまえた裏返しの希望を描きました。「仮面の町」「死滅する村」に登場する子供達も、社会を改めようと決意したり、希望を守ろうとしたりするのですが、その希望の部分を前面に押し出したものが未明の童話である、それが未明童話の魅力だと私は考えています。

次の文章において、未明は大事なことを語っております。

「私が子供の時分から、頭の中には、善い暮しをするのも、悪い暮しをするのも、出世をするのも、又一生不遇で終つて了ふのも、畢竟（ひっきょう）それはその人の運であつて、如何することも出来ない事だと云ふやうな思想があつて、どれ程私を陰鬱にさせたかしれない。（中略）これ等の悪弊の原因がその源をすべて資本主義制度の上に発してゐることを知つてからは、事毎につけてその事実が眼に映ずるやうになつた。」

人の運と思っていたものが、「これ等の悪弊の原因がその源をすべて資本主義制度の上に発してゐることを知ってからは、事毎につけてその事実が眼に映ずるやうになつた。」と、このように捉え返すようになったわけです。

高田の町を、未明は「眠い町」と呼んだり、「仮面の町」「死滅する村」と呼んだりしています。しかし、それはかつて美しかった町が、変わっていった、変わったのは実は近代の大きな力によって無理やり変えさせられたのだ、という理解があったと考えてよいでしょう。

図1は、高田の町が当時、「高城村」と「高田町」に分かれていたことを示しています。未明は士族の人達が住む高城村の出身でした。一方、商人たちは高田町の方に住んでいました。この村と町の関係の中で、未明の小説や童話が作られることが多かったように思います。

ここで、まとめにならないまとめをしておきたいと思います。

未明が描いた郷土は、確かに未明が見た郷土でした。しかし、暗さの中にある無常や運命観は、人が抱く無常や運命観に通じるものでした。また郷土の人々が抱く階級意識も日本の階級社会に通じていました。子供時代に未明が見た自然は、読者の子ども時代を刺激するものでもありました。未明文学の北国・雪国という郷土は、日本のある地域、高田を映しだすだけでなくて、人間の置かれた運命や近代社会全体を映しだすものとして用いられていたように思います。

未明は、童話や小説の中で北国・雪国を繰り返し描いています。宮沢賢

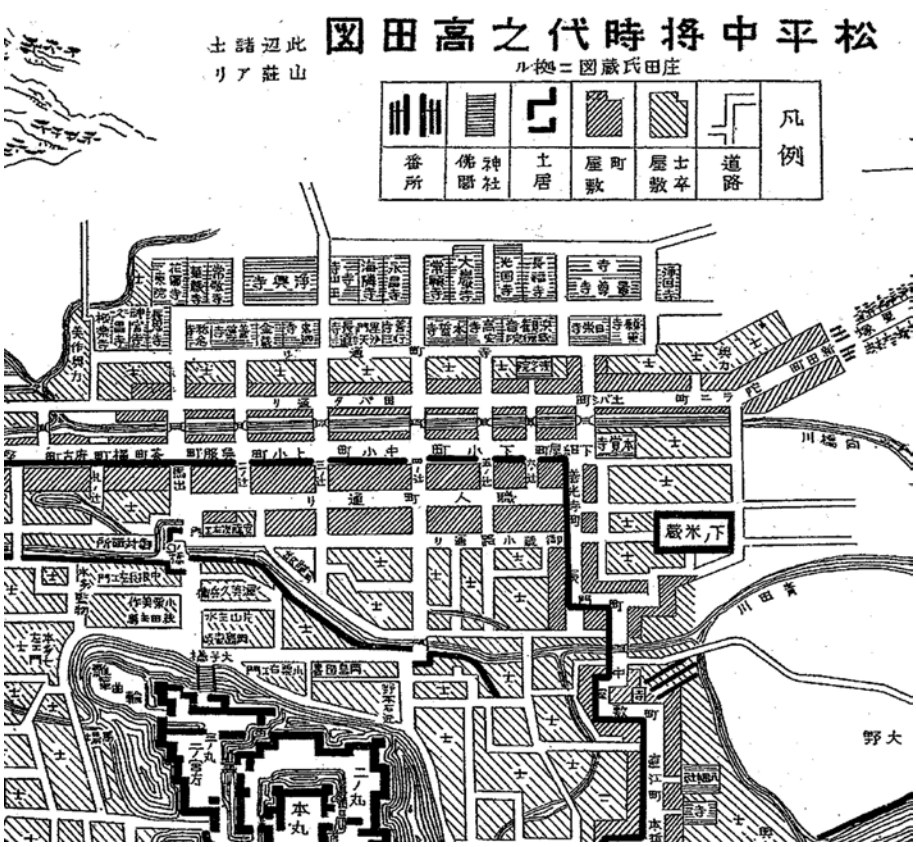

図１　高城村と高田町の地勢『高田市史』より

治は岩手地方を「イーハトーブ」と呼びましたが、未明が描いた北国・雪国の物語世界も、「イーハトーブ」に匹敵する規模と独自の世界を持つといってよいでしょう。

未明は熟知する郷土を見つめることを通して、ローカルな問題をグローバルな問題に昇華することのできた作家でした。未明は都会から郷土を捉えていました。その意味で未明を郷土作家とのみ捉えてはならないと私は思います。

未明は郷土の自然を愛しましたが、一方で近代化によって生じた郷土の人々の心のひずみや、あるいは商人や地主の傲慢・横暴を批判しました。郷土を見つめ、足もとを照らすことで人々に自省をうながし、理想世界へと意識を向かわせる、その回路が、未明文学の中には備わっていると思います。未明作品が今改めて注目される理由は、この回路があるからだと思います。暗さの中に希望の光を灯す力があるからです。そのために身を犠牲にし、人のために尽くそうとする強い意志の姿勢が、私たちに生きる勇気を与えてくれます。本来あるべき世界を我々が我々自身の手で取り戻して行かなければならないことを私たちに教えてくれます。私たちを取り巻く様々な難しい問題に、光を灯す力が未明文学には備わっています。

時間がまいりました。どうもありがとうございました。

宮川：小埜先生、どうもありがとうございました。未明は高田で生まれ育ちますが、やがて早稲田に移動しますね。次は早稲田大学の千葉俊二先生、「小説と童話との間」というテーマを頂戴しています。よろしくお願いします。

■「小説と童話との間」

千葉　俊二

千葉：千葉でございます。私の方は「小説と童話との間」ということで、未明の出発期の問題を、簡単にお話しさせていただきたいと思っています。

二年ほど前に岩波文庫で『日本近代短編小説選』において、明治編から昭和編まで全六冊で近代文学を代表する作家達の短編小説を、各作家一編をチョイスして、それを時代順に並べていくという仕事をいたしました。そのときに小川未明をやはり取らざるをえないので、小川未明を入れることはすぐに決定しました。しかし、小川未明の何を入れるか、どの作品を

入れるかということで、少し悩みました。結果的には「薔薇と巫女」という作品を選びました。しかし、「霰に霙」という初期の作品がありまして、これ、私が大好きな作品なんです。小学校時代の思い出をベースにしながら、多分にフィクションも入っているのかもしれませんが、子供時代を回想する作品になっています。

この「霰に霙」という作品も入れたかったのですが、分量的に多かったので、さまざまな他の事柄との関連もありまして、全体のバランスの中で「薔薇と巫女」を取ることになりました。

そして考えてみますと、明治三十八年三月『新小説』に「霰に霙」という未明の初期の代表的な作品が発表されますが、これを一つのきっかけにしながら、この明治末年から大正初年にかけて、次々と子供時代の思い出を記す、という作品が文学史的に登場して来ます。寺田寅彦「竜舌蘭」、中村星湖「少年行」、小山内薫「十三年」、木下杢太郎「波高き日」、永井荷風「狐」「下谷の家」、後藤末雄「推移」、谷崎潤一郎「少年」、水上滝太郎「山の手の子」「ぼたん」、久保田万太郎「浅草田原町」などです。

これは一体どういうことなんでしょう。それまでの明治の文学は、こういう子供が出てくる作品は、そう多くはないです。出てきても、「たけくらべ」のように、フィクションの中で子供が大人の世界へ移っていく過程で、大きな問題にぶつかるというものがあります。あるいは国木田独歩が「春の鳥」などの作品で幾つか子供を取り上げた作品があります。泉鏡花はよく自分の子供時代の体験をベースにしたフィクションの作品を沢山書いております。

パネリスト　千葉俊二

しかし、そんなに多くの子供が明治の文学に登場することは、これまでなかったのです。これが明治三十八年、明治の三十年代の末から四十年代にかけて急に多くなっていきます。明治という時代は、まだ近代国家という体制が出来上がっていない時期です。これからの日本を、どうつくりあげていくのかという大問題を抱えておりましたから、子供の追憶的な世界に浸っているというような余裕もなかったのではないかと思います。

それが一応、日露戦争に勝利し、まがりなりにも世界の一等国になったと自負を持ち、そして明治の国家体制もどうにかこうにか近代国家としての体制を整えていく、という状況の中で急に子供達を主人公にしながら子供時代を回想するような、そういう作品が書き出されてきます。これが一つの面白い文学的現象だなと思います。

そして、この「霰に霙」。どのような作品か、少し冒頭箇所の引用文を紹介します。

「村里先生という二十五、六歳の女教師で、痩形の眸の涼しい口許のしまつたそして額際に掩い被さるほどの黒髪を夜会に結んで、耳朶の辺りに溢るるほつれ髪に厭らしい油の香りはないけれど、高潔な真白なリボンはさながら緑色の春野に飛んでいる胡蝶の姿に似ている。私はどういふものか心の底から村里先生が慕はしくつて、折々夢にさへその面影を見たことがある。（中略）先生の歌の声はなんたる美しい声であるかと思った。ああこんな美しい声で草花の匂はしく咲いている野原で、ただひとり麗かな春の日に、先生がオルガンを弾いていなさつたならば、天女がきつと降りて来て、先生を翼に載せて、雲雀の鳴いている雲の上へ舞い上がって、あの緑色の大空に隠してしまふだらう。そして草の葉に吹く夕暮れの風はきびしく、しづ心なく花弁が白う散って、蜜蜂も巣に

帰る頃になっても先生は決して帰って来なされず、その時私の思ひは悲しく悲しく天女の行方に憧れて、広野の中に佇んで、夕焼け空を眺めてゐたならば、必ず遠い遠い西方の天上から風のまにまに音楽の調べが聞こえて来るでもあらうと思った。」

と、いうような形で村里先生に対する憧れがあります。それに対して数学がこの主人公は出来なくて数学の先生にいつもいじめられていて、残り勉強をさせられていた辛い思い、そのような少年時代の、小学校時代の様々なエピソードを連ねる形でこの作品は情緒性豊かに、未明の作品の中ではうるおいに富んだ作品として仕上がっているのではないかと思います。

この村里先生がオルガンを弾いてくれると、オルガンの音がさながら天女のように天空から舞い降りてくる、そのようなイメージをこの主人公に与えてくれます。面白いなと思うのは、例えば谷崎潤一郎が「少年」という作品をこの時期に書いておりますが、谷崎の場合は、オルガンではなくてピアノについて書いている箇所があります。ここも紹介します。

「ピアノって何だい」

「オルガンのようなものだって、姉さんがそう云ったよ。異人の女が毎日あの西洋館へ来て姉さんに教えてやってるの」

学校友達の家に遊びに行くと、大金持ちでその邸宅の中には西洋館があります。その西洋館の中からいままで聞いたこともない、いい音色が聞こえてくる。つまりピアノの音が聞こえてきます。

「こう云って信一は西洋館の二階を指さした。肉色の布のかゝつた窓の中から絶えず洩れて来る不思議な響き。……或る時は森の奥の妖魔が笑う木霊のような、或る時はお伽噺に出て来る侏儒（こびと）共が多勢揃って踊るような、幾千の細かい想像の綾糸で、幼い頭へ微妙な夢を織り込んで行く不思議な響きは、此の古沼の水底で奏でるのかとも疑われる。奏楽の音が止んだ頃、私はまだ消えやらぬ ecstasy の尾を心に曳きながら、今にあの窓から異人や姉娘が顔を出しはすまいかと思い憧れてじつと二階を視つめた。」

と、未明は、小学校時代に憧れた女の先生の弾いてくれるオルガンの音を聴いて、また谷崎はこの「少年」という作品の中で、幼な友達の家に遊びに行って、その西洋館から洩れ聞こえてくるピアノの音に、それぞれ限りない空想を広げています。そして、その空想の広げ方の質のうちにそれぞれの文学の違いというものが見えてくるのかなと思いまして、面白いと思いました。

それからもうひとつ、この時期、色々な作品が、子供時代を背景とした作品が、書かれていきます。それぞれその作家の基本的なスタンスといいますか、文学的な姿勢というものが　既にこれらの文学作品の中にはっきりと表れています。

例えば、永井荷風の「狐」という小学校時代の思い出を記した文章、ヨーロッパから帰ってきて最初の作品です。自分の家の敷地内に住みついた狐がいて、その狐が飼っていた鶏を食べてしまいます。その狐を退治するのだといって、大人たちが意気揚々と集まり、狐を退治するという話です。めでたく狐を退治した後、狐が鶏を食べたからといって大人たちが怒って、狐を退治したわけですが、自分が可愛がっていた、いつもハコベなどの草をあげていた鶏が、狐退治の酒宴のために絞め殺されて料理されてしまいます。なんと大人は身勝手な存在なんだろうという根源的、根本的な疑いを、そういった幼少時代の体験を通しながら描いております。

先程の谷崎潤一郎の「少年」という作品もそうです。大人になって干からびてしまった官能においては、決してうかがい知ることのできないような少年の持っている、初々しい官能の目覚めといいますか、谷崎的な世界ですからサドマゾ的な世界で、ほとんど無自覚的にサドマゾごっこをやっ

て遊ぶ少年たちの姿を生き生きと描き出しています。大人の乾ききった干からびた感性では絶対うかがい知ることのできないような官能の目覚めをビビットに描き出しています。こういう作品の中にその後の作家達の文学的モチーフが表れているのです。

ピアノの事に関して言うと、永井荷風がヨーロッパから帰ってきて「新帰朝者日記」を明治四十二年十月の『中央公論』に発表しています。音楽会があって、荷風はけっこうピアノを弾いたので、ショパンを弾こうと練習をします。練習を始めると、

「初りの行進曲だけは何うやら無難に行きながら、いざ最後の夜となつて秋の木の葉が墳墓に散りかゝる処になると、全く絶望しなければならぬ。日本の座敷に据付けた古物のピアノの恐ろしく音色の悪いばかりでない。天井、壁、柱、襖、障子、畳、各自異なる不快な汚れた色を露出にして居る日本の居室には、色彩の統一がないと同時に、また内部と外部との限界も立って居ない。（中略）自分はもうピアノを見るさへ厭な心持がする。」

と、いうような形で話をまとめています。小川未明、谷崎潤一郎はオルガン、ピアノの音を通して自分の未だ体験せざる彼方の世界に対する憧れ、奔放な空想力を燃え立たせていきました。ヨーロッパから帰って来た永井荷風はもう日本でピアノをひくことが出来なくなってしまっています。このあたりは、時代的な状況を的確にあらわしていて面白いなと思います。

少年時代の思い出を詩の形にまとめたものとしては、北原白秋の詩集『思ひ出』が明治四十四年六月に刊行されています。高村光太郎が「北原白秋の『思ひ出』」を明治四十四年九月に書評の形で『文章世界』に発表しています。紹介しますと、

「『思ひ出』が、現代の若いジエネレエシヨンの内部生活の世界に新しい色彩と、未知の領域とを与えた事は近頃の文芸界に於ける偉観である。（中略）「思ひ出」は、近頃続出する追憶文学の中で特に異彩を放っている。多くの矛盾と、重圧とに堪えきれない今の世の空気の中で、追憶は一種の避難所である。風に当る露台である。一時的のレフレッシユメントではあるが、文芸が、時に眼前の世界から遁れて、追憶に足を入れるのも止み難い傾向であらう。青簾を透して、日光を見るような美しい世界は、追憶の情操の中に容易く見出されるのである。但し、追憶は、魂がたゞ昔に返るのではない。飽くまでも、今の心と今の体とに住して、昔の世界を眺めるのである。」

と、いうふうに高村光太郎が『思ひ出』を評しています。ここのところに単に昔を体験的に懐かしんでいるわけではなく、「飽くまでも、今の心と今の体とに住して、昔の世界を眺めるのである」とありますが、ここが大事だと思います。

明治の国家体制が完成してしまうと、若者がそれをどんなふうに変えようとしてもなかなか体制自体はびくとも動かない。明治四十三年には大逆事件が起こる。同じ明治四十三年に日韓併合も起こっております。以後の日本の近代の国家のひとつの制度が、ここで決定されています。大逆事件がいってみれば国内的に徹底した思想弾圧の象徴になっているとすれば、日韓併合というのが対外的に侵略的な帝国主義の立場を露わにしていきます。近代日本の歩みというのはその延長線上に展開されていきます。そういう重苦しい現実を背景にです。追憶文学がこの時期に、「今の心と今の体とに住して、昔の世界を眺める」といった形で登場して来る。ひとつの象徴的な出来事だったのではないかと思います。

これは小川未明の明治四十四年六月に「少年主人公の文学」という全く似たような視点から同じような発言をしております。

「最近の象徴派乃至神秘派の作に、何故少年を主人公にしたものが多

いか。（中略）少年を主人公にするは、必ずしも過去追懐の意味のみではなく、また現在の苦しい生活状態から自己を忘却せんとて昔の夢幻的愉悦の状態を夢むるばかりでは無いのである。たゞ吾人は、常に子供の如く「無知」でありたい。「柔順」で、「真率」でありたい。要するに象徴派、神秘派の描ける少年は、大抵作者自身がSymbolizeせられて居るのである。」

と、このような思いを背景に持ちながら、明治四十三年に第一童話集、まだ「おとぎばなし集」というタイトルがつけられる過渡期的なものになっておりますが、未明の第一童話集の『赤い船』が刊行され「世界に幾億の人間が居る。私は其の中の一人です。其の私が子供の時分描いた空想は大抵斯様なものでありました」という形で、子ども時代に空想化したものを形象化したものが自分の童話であると言っています。これは宮沢賢治が『注文の多い料理店』でこれらの童話はすべて自然からもらった。と、言っているのとよく似た発想ではないかと思います。

『赤い船』の作品の中でもやはりオルガンの音が響いております。

「露子は貧しい家に生れました。村の小学校へ上がった時、オルガンの音を聞いて世の中には、斯様好い音のするものがあるかと驚きました。」

オルガンの音を通して、彼方の世界、海の向こうの世界へと思いを馳せていくというところに未明の第一童話集『赤い船』が書かれています。その後書かれる未明の童話の一つのベースになっていくとも感じさせられます。以上で私の発表を終わらせていただきます。

宮川：千葉先生ありがとうございました。千葉先生は昨日もお聞きになった方がいらっしゃると思いますが、文学館の文学館講座でもお話いただきました。その時のタイトルは、「憧憬の作家　小川未明」でしたが、今のお話もそこに重なるものがあったと思います。それでは、杉みき子先生よろしくお願いします。「山の上から曠野へ」です。

■「山の上から曠野へ―ひとりぼっちの二本の木―」　杉　みき子

杉：よろしくお願いします。今ほどお二人が本当に学問的な素晴らしい成果を教えていただきましたのに、私の話はたいへん自分の好みに偏ったものでして、あまりご参考にはならないと思いますが、お許しください。

「山の上から曠野へ―ひとりぼっちの二本の木―」という題にいたしました。小川未明の作品の中で何が一番好きですかと聞かれたときに、去年までは「山の上の木と雲の話」です、といつも答えておりました。去年から心変わりいたしまして、「曠野」です、と答えるようになりまして、今もやっぱり「曠野」が一番好きです。あらすじをお話しするまでもないかと思いますが、だいたいのところ一応お話ししておきます。

「山の上の木と雲の話」。

山の上にひとりぼっちで立っていた木が、ある夏の夕方に、大空の雲の女王のような美しい夕焼け雲が通りかかるのを見て、その雲にやさしい言葉をかけられて、もうい

パネリスト　杉みき子

ちど必ずここへ来ますからね、という雲の言葉を信じていつまでも木は立ち、待ち続けます。しかし季節はやがて秋から冬に向かって、「まだ、夏がめぐってくるには、長い間があったのです。」

と、いう言葉でしめくくられています。いまに雲が来てくれるだろうと思うが、その実現はいつのことかわからないということでしめくくられています。

「曠野」。

それまで未明の作品といっても、わりと一部分しか読んでいなかったんですけど、小埜先生のご尽力ですべての作品が読めるようになりました。その中の「曠野」という作品を読んで、わぁっと思いました。これはまるで「山の上の木と雲の話」の双子の兄弟みたいなもの、あるいは続編のようなものだと思いました。

これはどういうお話かというと、曠野にひとり立っている松の木が、風と戦いながら成長し、渡り鳥の話を聞くことでわずかに心を慰めています。ある日旅人がその根もとで休んで、木陰を作ってくれた事を感謝してこれから後も自分のような旅人を励ましておくれ、という言葉をかけて去っていきます。木は旅人の言葉から、彼の故郷に自分の兄弟のような同じような木のある事を知ります。自分では知らないけれど、遠い所に自分と同じような木が兄弟のように立っていると、だからこれからは孤独を嘆かずに力強く生きて慕い寄って来るものを慰めようと決意します。

そして最後の所に、「もはや野原の彼方は渦巻く黒雲のうちに包まれていました。」と、いう言葉があります。ここを読んで私はもっと早い時期に書かれた「角笛吹く子」という作品を思い出しました。

これは、冬の精霊のような少年が、おばあさん、魔物（冬の妖精）みたいな老婆と、その二人で、やって来る春に追われるようにして北へ北へと逃げていく。そして最後は後ろから春がどんどん追いかけて来ます。その中で少年は狼に飛び乗って、角笛を吹きならしながら威嚇するように春のひかりに対して手を振って、冬の彼方へと駆け去っていく、という話です。

私はもともと冬が好きですから、大概の童話が、春を待っている、春が来てうれしい、もちろん未明も例外ではありませんが、春が来てうれしいというお話ばかりです。ここで初めて冬を嫌いそうな未明が冬の少年の味方をして、もっと冬が続けばいいという気持ちを込めて書いているので非常にうれしくなりました。

冬の厳しい自然に向かっても怖れずに立ち向かっていくという心構えを決める「曠野」の木が、非常に身近なものとして私には感じ取れました。そこで「山の上の木」よりも「曠野」の木の方が私は好きだと勝手に決めましてファンになってしまったというわけです。

次にこの話の比較です。今お話しした通りですが、「山の上の木」の方は、名前がありません。憧憬し憧れに生きているような、ひたすら雲の到来を待ち続けるという存在ですね。結末にもう一度必ず雲は来てくれると約束してくれた、そういう希望はわずかにあるんですけど、夏はまだ遠いという、実現できるかわからないということになっているわけです。

「曠野」に登場する木の方は、「山の上の木」には名前がないことに対して、松の木と特定されます。本当は杉の木であってほしかったのですけど残念ながら松の木でした。来歴もやや詳しく書かれています。最後の方に至って、人のために生きようと決意する。そういう意志的な存在です。

横道にそれますけど、未明さんの忌日、未明忌の会というものが未明さんが亡くなって何年かの間、開かれており、その一回目が春日山神社で開かれました。そこでゆかりの人達が集まって、その時にやはり高田出身の作家の小田嶽夫さんが色紙に書かれた言葉が「世道人心」でした。それを見たときはこの場で書くのにはそぐわないのではと思いましたが、後になって考えてみますと「世道人心」というのは確かに未明さんにふさわしい言葉なんじゃないかなと思いました。「世道人心」の続きに、二本の木のあり方も描かれていたのではないかと思いました。

そのような思い入れもありましてこの、「山の上の木と雲の話」から、「曠

野」へ、の移り変わりが私には非常におもしろくうれしく思われました。

参考ですが、「山の上の木と雲の話」の時代の作品としては、「月夜と眼鏡」「大きな蟹」「黒い人と赤い橇（そり）」などロマンチシズムの時代の作品があります。

それから、「曠野」の時代の作品としては「椎の実」「マアチャントトンボ」「シラナイマチノコ」などリアリズムへ移り変わっていく時代、あるいはまた社会主義的傾向が芽生え始めた時期と分類できるのでないかと思います。

以上のことは二つの作品を読んで似ているなと思い、そしてどちらの木も好きだなと思ったところから始まりました。私の独り言みたいなものです。まとまりのないお話で失礼いたしました。

宮川：杉先生おもしろいお話ありがとうございました。興味深く拝聴しました。それでは続きまして堀越さん、ご自身の絵本『眠い町』をめぐってのお話になるかと思いますが、よろしくお願いします。

■「眠い町」　堀越　千秋

堀越：こんにちは。とりとめない話になっちゃうかと思うんですけど、小川未明の孫の小川英晴さんて詩人がいらっしゃって、僕の飲み友達で、ずいぶん昔から大酒飲みです。僕はそんなんじゃないんですけど、彼はお酒で肝臓悪くしたりして徹底的に飲む人なんですよね。大柄でさっき見たら未明も大柄で顔も童顔で英晴さんともそっくりでね。こんな太って毬のような体してるんですけど。

未明の作品は「赤い蝋燭と人魚」くらいしか知らなかったんですが、もともと絵描きのせいってわけじゃないけどあまり字読まないんですよ。本も読まないんですよ。読めないというか、三ページも読むと寝ちゃうんですよね。だから未明のは短いから寝ないで最後まで読めるんですが、それぐらいしか知らなかったんですが、英晴さんとの縁でもって「僕の祖父さんの童話の絵も描いてくれ」っていうわけですね。「いいよー。」なんていって「いつになるの？」って言っていたんだけど、架空社という絵本の会社がありまして、非常に消極的な名前で、架空社なんて名前ですけど、僕の高校時代の友人が社長兼小遣いでやってる会社なんですね。そして、二人があわさって、「描いてくれ」って、「何描くの？」、「『眠い町』ってのがいい」っていうからどれどれって読んだら、これがなかなか面白くてですね、少年ケーってのが出て来るでしょ。ケーってのはＡＢＣのＫですから、ずいぶんモダンだなぁって思ってみたら、大正三年の作品じゃないですかね。僕らが今住んでる村に、僕が生まれた村ではなく、僕は冷やかしみたいにその村にいるわけですよ。生まれは東京の下町の長屋なんですけど、そんなところもう存在しませんので、郷里というものが実感としてないんですけど、ましてスペイン行ってふらふらしてますので、ピンとこないんです。郷里というのが僕にとってあまりよくわからないんですよね。未明は「どっちかといえば私は郷里の人々を好まない。」と書いてあるわけですね。で原因は「因循姑息だ」とあるわけです。みなさんの顔見てると因循姑息だとは思いませんけども、こういうこと言ってるんだなぁ、おもしろいなぁと思うわけです。

パネリスト　堀越千秋

故郷というのはいろいろ複雑な思いがあるんでしょうね。僕が今住んでる村っていうのが、埼玉と群馬の境目の山の中にあり、そこにたまたま縁があってそこにいるんですけど。家賃が少ない、ただみたいなところなんで、若い人で絵を描いたり、自由と貧乏が好きみたいな人がみんな来ちゃって、みんなその辺に住んでるんですよ。若い友達の住んでいる古民家の一軒が大正二年で、ギシギシいうんですがちゃんと建っててちゃんと住んでいるんです、快適に。その人アメリカ人なんで便所とかきれいにしていい感じになってるんですよ。はー、そうかねー、これ大正二年ねぇ、と。少年ケーは大正三年ですからすごいモダンだなぁと思ってね。この少年ケーのイメージと古民家のイメージが合わなくていたんです。それくらい進んでいるというか、未明の美意識が冴えてたんだなと思ってね。

少年ケーは元気のいい勇気のある、それでいてさりげない、そういう少年に思われたんです。じゃどんな格好しているのかな。学帽被っている、半ズボンという勝手なイメージにしたんです（図２）。

話が飛ぶんですけど、京都の古い帯問屋がありまして、よくテレビに出る方で、ご存じの方もいらっしゃるかも、源兵衛さんっていう頭はつるっとして派手な着物を着て、粋な帯をしめてだんじりで走り回ったりするような変なおっさんがいるんですが。その人が京都の三百年の帯屋の旦那なんですが、僕が展覧会を京都でやった時に、僕が陶芸家でもないけど、変な茶碗を作ったんですよ。それを見てね、ずいぶん値切ったけど二つも買ってくれたんですよ。それでこんな変なもんを作るのはどこのどいつやねん、ってベンツ二台連ねて僕の山の中まで遊びに来たんです。連れてかれてベンツで京都まで行ったわけです。ヒマだから。そしたら帰りに京都の三条のど真ん中に帯問屋があって、そこに住まいがあるんですけど、三十畳敷き広間に円山応挙の掛け軸とかあるんですけど、ここで寝ろってんですよ。それで寝てたら、翌朝四時五時、ぎりぎり日が昇る前に、ふすまがガーンと開いて子供がバーンと五，六人入って来たんですよ。小学生が半ズボンはいてるんです。バーっと入ってきて、僕の布団の周りでぐりがえしするわけです。「きゃははは」っていうからなんで客が寝てるのに、このうちは子供を放し飼いにしているのかなって思って、バッて飛び起きたらいないんですよ。つまり夢のようなもので、いないんですよ。これはひょっとして座敷わらしかなと思ってね。その時の半ズボンはいて、白い襟で昔の小学生の、それで学帽かぶってる。そのイメージがあったのでそれをケーにしたわけです。その少年が元気よくいろんなところへ行ってみたり変なおじいさんに会ったり、疲労の砂を撒かされたり、ほんとに撒きに行ったりするわけです。そういうイメージはそこから来ていると、そのつもりなんです。

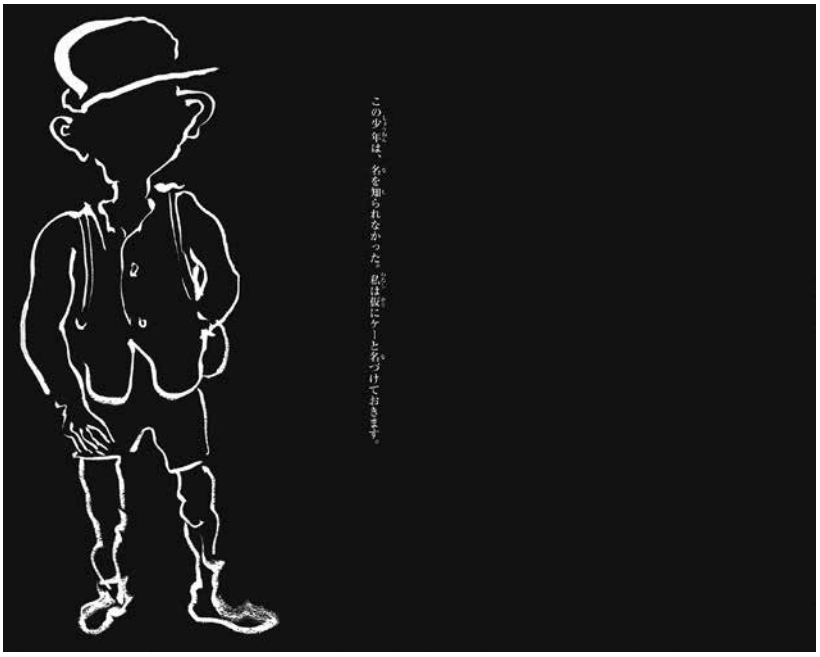

図２　少年ケー　『眠い町』架空社より

こういうものは、さっき小埜さんがおっしゃった未明は人の痛みを自分の痛みとする、お話がありましたけど、そういう同情、見たものに心を添

わせる、美しいものとか、人が苦しんでいるとか悲しんでいるとかそういうものに心を添わせる尊さがあると思います。

童話でこの話を描いてください、といわれて「はいはい～」と、描けるわけじゃないですよね。そこに自分の同情、つまり主人公が痛んでいる時は、こっちも痛まなくちゃ、その絵にならないわけで、そういう意味では少年ケーは非常に僕にとっては良い少年なわけですよ。だから、そこに同情して気持ちを入れてそこに、どんな爺さんが出てくるのか、その爺さんも「もう文明は厭じゃ」ってね「疲労の砂撒いてこい」っていう、その気持ちってのは非常にわかるわけですよね。今まさにこの地上が砂になっちゃあ困りますが、そういう気持ちというものはありますよね。こんな悪い時代なら ゼロにした方がいいんじゃないか、みたいな気持ちってのは僕らの中にどっかにあるはずなんですけど。そういうものをこの爺さんが言ってるわけですね。そこに僕も気持ちを添わせて、こんな爺さんかなって描いたわけですね。

後ろ姿のシルエットがあるでしょう、ちょっとおかしな感じの爺さんがね（図３）。後ろ姿はお爺さんですね。前野君って僕の旧友がひょろひょろと背が高くてこんな感じなんですよね。歯も抜けててね。なんで歯が抜けたかっていうと、酔っぱらって自転車で転んで。なんで歯を入れないんだっていうとね、金がないっていうんですよね。そういう爺さんのイメージがああいう感じなんですけど。

未明は数学が苦手って話があって、僕も数学が苦手で、僕は有名な数学の苦手な生徒だったわけです。高校の時に、新任の数学の教師が来て、「このクラスで一番数学の出来る人は誰ですか？」っていったら前野君が「ホーリコッシー」って言ったんですよ。皆「えー」って言って。その先生はまるまる信じて難しい問題になると僕に当てるんですよね。僕が「わかりません」って言うと「そうか、堀越君でもわからないか」っていうの。そういうふざけた男が前野君だったんで。まだ、生きてますけども。今、前野君とまた新しい絵本をやってまして、木村裕一さんっていって、あの『あらしのよるに』っていう童話を作った人がいて、彼も昔の浪人時代の友達なもんですから、僕も前野君も貧乏人だから、木村裕一君は『あらしのよるに』が映画になって歌舞伎俳優となんかやったりして、大当たりして家も一軒建てたというから、お前に寄りかかって、俺らも一冊出そうって。もう、三、四年前からやってんですけど、やっと出来たんですけど、前野君がお金がないので、その絵本が今、出ないんですよね。そういう状況にあります。

図３　爺さんのシルエット　『眠い町』架空社より

本とかこういうものは微妙な、小川未明の時代もおそらくそれは間違いないと思うんですけれど、危ういバランスの上で出来てるんですよね。だから、小川未明、こういう本出ました、こういう本出しました、芥川龍之

介がこうですって言うけども、それはまことに編集者と編集外、出版社とそれぞれの怪しい微妙な経済と、いろんな事のバランスの上でやっと、やっと出ました、みたいないうのは絵本なんてまさにそんな売れるもんじゃないので、だいたいそういうもんじゃないかなと思うんですが。ギャラは僕は一度ももらった事ないですよ、この架空社から。一度五万円もらったら「え、君、架空社から金もらったの？ダメじゃない」って片山健さんに叱られました。

一時、未明が社会主義的な考えに至ったというね、資本主義がだめだろうという話がさっきありましたが、金という事に関しては、社会主義は平等ということで、かつてソ連だった頃に僕も、とりとめのない話で申し訳ないですが、シベリア鉄道でずっとヨーロッパに行ったんですよ。その時にソ連のおじさん、おばさんたちと汽車ですから食堂車に行くという訳ですね。僕ら二等車で、皆さんソ連の庶民は三等車にいて蚕棚に寝ていて、電車の中にストーブがあって、その前に温まっているんですけど。そういう所を見にいってもいいんですけどね。

そういう人たちを見ると、お金は大体皆さん平等だったんですけれども、権力というのがあって、権力が不平等なわけですよ、ソ連というのは。つまり勲章があって、みんな勲章を欲しがって、なんか僕らの胸にピカピカ光っているのを見ると、それをくれ、それをくれ、というんですよね。子供達もそうなんですよ。

それでモスクワへ着きまして、そしてモスクワの安い食堂とかに行きますよね。そうすると、こういうふうにダーッと列があって、みんな安い食堂に並んでいるんですよ。するとおばさんが、マッシュポテトというか、芋の茹でた白いやつを洗面器みたいのに一人ずつくれる訳ですよね。並んでいるんですよ、みんなね。それしかない。するとおばさんが、ぷっと途中でやめて向こうを向いちゃうんです。するとこっちの庶民は、お願いします、お願いしますと言うんですよ。で、おばさんは向こうを向いて、やだ、というわけです。何が気に入らないのか分からないんだけれど、マッシュポテトをくれないわけなんですよね。ずーっと僕らは待っていなくてはいけないんですよ。やがておばさんが気が向くとマッシュポテトをくれるんです。なぜかというと、つまり彼女はそうする権利があるわけです。つまり権力を持っているわけですよね。彼女がそれをくれない限り誰も文句言えないわけです。庶民がくれ、くれと言っても駄目。彼女がマッシュポテトをつぐ権利、権力を持っているわけですよね。彼女は権力をそこで使いたい訳です。

つまり、お金はみんな平等になった。ただ、今度は、人間というのはしょうがないもので、なんか自分が偉くなりたい、資本主義なら偉くなりたい人はお金を儲けるんですけど、社会主義で偉くなりたい人は、権力を持ちたいんですよ。だから結局人間というのは、しょうもないもんで何か人より偉くなって、何か人より多くのものが欲しいんですね。ということを僕はしみじみ感じて、ソ連も遠からず駄目だなという感覚を得ましたよ。そしたらソ連はやがて崩壊してロシアになって今はなんだかよくわかりませんけど。そういう、人間というのは欲深いもので、腹の底から欲深いですね。だから五十円、百円と言っているうちはいいけど、大企業がとかなってくると雪だるま式に得体の知れないものになってご覧の通りになっているわけですけど。そういうことをしみじみ感じます。だから、未明が言っている通りですね。未明が言っても世界は変わりませんけど、でもやっぱりこういう人がいっぱい増えてみんなでわぁわぁ言わないといけないんだなということ、わぁわぁ言わなくてもいいんですけど、いろんな形で思いを表現するのが大事なのかなと思いますが。

あと、僕は新潟には何かとお世話になっていることが多く、結果的にそういうふうになっていまして。昔、長岡の方の小国町に三ヶ月くらい住んでいたことがあります。それは芸術家村というのがあって貧乏人を住まわせてくれるんですよ、貧乏な絵描きを。そこで三ヶ月くらいゴロゴロいて、素晴らしい所でした。そこの蕎麦に、ご存じかもしれませんが、三桶の蕎麦という素晴らしい蕎麦屋さんがあって、おじいさんとおばあさんがやっ

ていまして、童話のようなお蕎麦屋さんが田んぼの中にあって、魚沼の田んぼの中にあって、そこへ僕らよく蕎麦を食べに行っていたんですよ。

そして、小川英晴さんと行きまして、そこで、「この人小川未明の孫だよ」と言ったら、「えー」と言っておばちゃんが大急ぎでどっかから色紙を持って来て、サインしてあげたら、「へー、この辺は文化度が高いね」と言ったら「いやそうじゃないよ、小川未明は新潟だからね」という話になってわかりましたけれども。そこで色紙なんぞを描いた記憶があります。

それで、よろずやにお酒を買いに行くと、「久保田」がなかったんですよ。おばちゃんが「すいませんね、こんなのしかなくて」と言って「景虎」出してきて、「なんだか知らないけどこれでいいや」と言って三本くらい買って帰ったんですよ。それで東京の方に出てみて、電車の中で隣のおじさんが読んでいる新聞見たら、「幻の銘酒、景虎」と書いてある、そういう素晴らしい国だなと思って、僕は本当に楽しんでおります。

時間ですが、一つだけいいですか。小千谷という町がありますね、西脇順三郎のね。あそこに「新潟銘醸」という酒を造る所があって、そこの社長さんと知り合いなんで、「あなたのとこの酒は非常に美味しいけどラベルは最低だね」と言ったら「じゃぁ、あんた描いてくれ」というからラベルと箱を描いたんですよ。それもギャラいらないから酒をくれと言って、必要な時は酒を貰えることになって、その銘柄が「El Chiaki（エル　チアキ）」といって、宣伝してしょうがないですが、「El Chiaki（エル　チアキ）」といって大吟醸でおいしいから、是非どこかでお目にかかったら飲んでみてください。ありがとうございます。

宮川：ありがとうございました。お話が一巡いたしました。この後松本さんからお願いしたいと思いますが、他の方の話に対してのご質問、ご意見、あるいはご自分の話の補足でも結構ですので、何かございましたら一言ずつ松本さん、小埜さんと、もう一巡したいと思います。よろしくお願いします。

松本：堀越さんの話に調子を合わせると、きっと宮川さん、後で苦労されそうな気がするので、話を戻した方がいいかなと思います。

さっき、千葉さんなども、子供が一九一〇年代ぐらいから文学の中に登場してくるという話がありましたけれども、おそらく日露戦争の後に、日本が一応近代国家という体裁を整え、ヨーロッパからの様々な文化を受け入れた時に、「子供の発見」という社会現象が起こったと思います。

もともと二十世紀になってからエレン・ケイが『子どもの世紀』を著し、婦人運動が起こったり、子供の権利を大切にしようという運動が広がります。日本でもその影響を受けて、平塚らいてうらの先進的な文化人が広めていきます。それが一九一〇年代ぐらい、大正の時代だと思います。その中で未明をはじめ、文学者や編集者や画家たちが「子ども」を発見して行きます。

だから、あの時代に『赤い鳥』『婦人之友』が出たり、『子供之友』『コドモノクニ』が出たりします。そうした雑誌類が一気に出てきます。童話も童画も童謡もその中で発展します。あの時代の文化のうねりの中で、子供というものの発見があったというのが、今お話を聞きながら思ったことでした。

この時代、先ほど千葉さんがおっしゃっていましたが、一九一〇年の大

パネリスト　松本　猛

逆事件と日韓併合があります。これはまさに軍国主義の台頭と自由主義的な考え方が広がるのが重なった時期だったのです。そのために未明は色々なことを考えるし、文明とは何かも考えるのです。そんなことを、今お話を伺いながら感じました。そのへんのことについて皆さんのご意見も伺えたらいいなと思いました。

宮川：ありがとうございます。では、小埜さんから今のお話を引き受けながらおっしゃっていただければと思います。引き受けられたらで結構です。

小埜：小川未明は明治十五年の生まれです。その後この日本海側が、表日本ではなく裏日本だ、という意識が形成されるのが、明治二十年代後半だといわれています。日清戦争の前後です。近代社会になって、格差が広がり、そのあと日露戦争があり、だんだん明治国家の形が整ってくると、逆にいろんな社会の軋みも出て来るようになりました。人々の間に「どうも腑に落ちないな」ということがたくさん現れるようになってきました。

そうした背景のなかで、先程の子供の発見もあったわけですし、社会を変えていこうとする社会主義の運動も出て来たわけです。大正時代になって、なんとか社会を変えていかねばならないという流れの中で、未明は童話を書き、社会主義の運動に入っていきました。それは未明の文学にとって追い風になったと言いますか、自分の考えていたことが時代の流れに合致したといってよいでしょう。

その後、昭和に入り、社会主義では社会を変えられないから、今度は全体主義というふうに時代が変わり、その主義によって金の力、資本主義の弊害を乗り越えることができるかもしれない、それに賭けてみようと未明は考えたのだと思います。しかし、全体主義で社会は変わりませんでした。戦争期は未明が子供を裏切った時代であろうと思います。

先生方のお話を伺っていて、人のために生きようと決意をする、社会がおかしくなったとき、それを変えていかなければいけないと決意するのは、明治時代の人の高い志と言いますか、それが未明の中にあったのではないかと考えておりました。

パネリストの５人

宮川：千葉先生お願いします。

千葉：まず小埜先生のお話を伺って、未明がこの高田という地に、生い育っていかに自分の文学の核にしていったか、先程いろいろな作家の子供時代の回想をベースにした作品を取り上げたんですけど、改めて考えると、みんなそれぞれに郷里というものを、明治の時代は非常に根強く自分の文学の核にしているなと思いました。例えば、北原白秋について考えてみても、柳川の風土は切り離す事ができないわけです。ここのところで寺田寅彦の「竜舌蘭」なども同じです。永井荷風にしても東京の下町や山の手と切り離すことができません。谷崎潤一郎は東京の下町、関東大震災後に関西に移住しても、やはり谷崎は江戸っ子であったということで、そういうひとつのベースが、すでにこの時期に作りあげられているのかなという感じを

強く思いました。

確かにこの時期に子供の発見ということが行われています。実際には児童文学の出発点が、明治二十四年の巖谷小波の『こがね丸』で、この作品がシリーズの第一作となった博文館の『少年文学』を全部読んでみたことがありましたが、なんと女郎買いといったことが出てくる。『少年文学』というタイトルでありながら、女郎買いの話が出てきてびっくりしました。当時はまだそんな意識だったと思います。大正時代になっていくと、読者としての子供を、作者としてもはっきり意識していくのではないかと感じました。

小埜先生がまとめてくれたところ、すごく面白くて私もしみじみ感じます。

「又一生不遇で終わって了ふのも、畢竟それはその人の運であって、如何することも出来ない事だと」

云々と言われています。最近授業でよく言うんですが、例えば、村上春樹と私とは、早稲田のキャンパスでおそらく六年間一緒にいたはずです。彼は七年間在籍し、私は五年で終わって、そのあと大学院に行っておりますので、六年くらい一緒に早稲田のキャンパスにいたと思います。出発点は一緒なのに、現在ではなんで彼は世界的な大作家になって、私はしがない大学教師をやっているのか、この違いは何だと。この違いを生んだファクターを見極めることができたら私は死んでもいいと思っています。なかなかそれが見極められなくて、今悩んでいるところなんです。おそらく人間の不平等はどこかに働いていると思います。その原因を突き詰めたいと思いますが、なかなか難しいと感じております。以上です。

宮川：では、杉先生お願いします。

杉：余談になりますが、先ほど松本さんが大逆事件のことに触れられました。その大逆事件にすぐれた弁論をして、被告たちからも感謝された弁護士が平出修です。この人は新潟の出身で、高田の女性と結婚して僅かの間高田に住み、間もなく上京しますが、その上京の時期が未明の上京の時期とほとんど重なります。平出修は大逆事件の弁護にあたって、森鴎外などにも教えを乞うて、無政府主義や社会主義のことを徹底的に勉強しますが、そのあたりで、次第に社会主義、無政府主義に関心を持つようになった未明との接点はなかったものかなあと思います。性格的にも似たところがあるし、相馬御風という共通の友人もあることなので、どこかで会っていたら面白いのになあと、まあ同郷人の欲で、いろいろ空想してみるわけです。平出修は若死にしてしまったので、無理な話ですけどね。

宮川：では、堀越さんひとことお願いします。

堀越：子供の発見と、松本さんがおっしゃって、子供って考えてみたら、ぼくは四十年くらい前からスペインに行ってるんですけど、その頃はフランコ独裁だったですね。そうすると子供も働かなきゃいけないんです。子供が実際砂利を運んだり、バーへ行くとワインを運んだり、子供がたくさん働いているんです。子供もちゃんと大人の端っこの一員として働いているんです。今はそんなことは誰もしてないんですけど。その頃子供っていうのはそんな感じで、そのかわり愛らしいというか、なんかそこに哀しみというか、子供の愛しいものがあったですね。少年たちを見ててもね。未明の少年というのはそういう匂いがありますね。

時代が、そのころの子供ってのはガキであって一人前の人間じゃないはずですよね。だから賃金ももちろん安いし、こき使うし。スペインでは子供が主人公のトルメス川のラサリージョっていう昔のドンキホーテの時代の小説（『ラサリーリョ・デ・トルメスの生涯』）がありますけど。ディケンズが後に翻案して少年が苦労する物語がありましたね。オリバー・ツイ

ストかな。そういう哀しい少年というのが昔はいたんですけど。この頃はそういうのは見られなくなったんですけど、未明の時代の名残が、フランコの時代は遅れていましたからそういう所にあったのかなと思って。

例えば、アイスクリームとか売っているんですよ、子供が。そのアイスクリームを売っている子が、お腹が痛くなって。その頃僕スペイン語わからなかったけど、（子供が）お腹が痛いっていうんで正露丸をあげたんですよ。そしたら正露丸一個あげたら、ばくっと食べて治っちゃったんです。そしたらその子のおやじみたいなのが来て、その少年が「このあんちゃんがくれた薬で治ったよ」みたいなことを言ったらしいんです。したら、おやじが僕のこと見て怖い顔して「いくらだ?」っていうんですよ。「タダだよ」って言ったらニコッと笑って「グラシアス」って言ったんですけど。

そういうかわいらしい少年が砂利運んだり、お腹痛いの我慢してアイスクリームを売っていたり、まぁ自分でアイスクリームを食べてお腹痛くなったのかもしれませんが。そういう少年、子供の発見ということで、今ひょいと思いだしたのがそのことですね。

未明は子供っぽいところがあったという話ですけど、孫の小川英晴さん見てると彼も非常に子供っぽくて、非常に凝り性で、未明もおそらくそうだったんだろうと思うんですが。文学館に並んでいるあの焼き物ね、古代の、縄文とか弥生の。かなり凝って執着して集めたんだなってのがよくわかりますが。英晴さんもオーディオに凝ったりしてね、白金のコードとかありますよね。普通の電気のコードでは音が悪くなるからとか言って、白金・プラチナのコードをくっつけて、これだと音が良くなるとかやってるんです。僕が「こちら側は白金だけどコンセントから向こうの電柱まではどうなってんの?」って聞いたら、ぎーっと人の腕をつねくりました。そういうところが未明にもあったのかなと思って。

僕らの村にシャーマンのおばちゃんがいまして、霊能者みたいなおもしろいおばちゃんがいるんですけど。小川英晴さんと三人でしゃべっているときに、「どう、この人なんか見えますか?」と聞いたら「見える見える、後ろにね、大柄で杖ついてこんなふうにして歩いてるおっさん見えるよ」と言われて「それ俺の祖父さんだ」って英晴さん言ってましたけど。

子供っぽい、単に子供じゃない、天地に通じたスカッとした部分が子供にありますけど、そういうところは未明にあったんだろうなと感じますけど。雑談ですいません。

宮川：ありがとうございました。みなさんの中にもお聞きになって、ご自身の中にも言葉が降り積もっているのではないかと思います。何人かということになってしまうかもしれませんが、ご質問、ご意見ございましたら手を挙げてくださいませんでしょうか。

はい、お願いします。

質問者：確か妙高の小学校だったと思いますが、「夏が来るたび、雲に風に少年の日を思い出す。妙高山、いまも若きたましいを呼び」という碑が確かあったような気がします。千葉先生にお伺いしたかったのは、この詩は、先生のお話によると、明治の末期か大正の時代に作られたのではないでしょうか。さきほど村里先生云々というお話をなさった、そういう時代の未明の詩だったのではないかと。私ちょうど長野県の、新潟県を向いて生活をしており、妙高山の裏側です。毎日朝起きて妙高見て育ちました。ぜひ伺いたいと思って参りました。

宮川：どなたかコメントございますか。

杉：その碑は昭和二十八年に作られたものです。当時の中郷村の村長さんの松井泉吉さんという方が、たいへん未明を尊敬してらして、ぜひ子供たちに未明先生の碑を建てたいということで、中郷小学校の夕日が丘という小高い丘の所に、その詩碑を建てられました。

「夏が来るたび、雲に風に少年の日を思い出す。妙高山、いまも若きたましいを呼び、高原に咲く花白赤　清香を放ちて、かゞやく海を杳かに望む。ああうるわしきかな、ふる里よ。」

でしたかね。そういう詩を書いて、裏の方に、

「未明先生の情熱を百代の子供等に贈る」

という言葉があったと思います。当時の中郷村長の松井泉吉さんが、未明さんを尊敬のあまり、強いてお願いして、碑の文字を頂いたとお聞きしております。そんなところでよろしいでしょうか。

宮川：杉先生ありがとうございます。他の方どうでしょうか。お手を挙げてください。

質問者：今日は小川未明についていろいろご自身でもご研究なされたと思いますが、今日この時点から小川未明とどのように繋がっていかれるつもりなのか、それをお聞きしたいと思います。

来場者の質問に聞き入るパネリスト

宮川：ありがとうございます。まとめの質問を頂きました。これで答えると終わってしまいますので、もう少し聞きたいことがあったら合わせてお聞きしたいと思います。他にございますか。いいですか。

大変いい質問ありがとうございます。今日これから未明とどのように向き合っていかれるか、一言ずついただいて、それでまとめになるかなと思います。では、小埜先生から行きます。

小埜：今の私が未明についてやっておりますのは、小説、随筆、童話以外のものがどれだけあるのか。それがいつ、どういう雑誌に発行されたのか、それを整理したものを皆さんにご提示したいと思って仕事を進めているところです。未明のことは尚しばらく勉強していこうかと思っております。やめるかもしれませんが、一生懸命やりたいと思います。ありがとうございました。

千葉：私も昔は大学の授業で、児童文学の講座を持っておりまして、小川未明も講義していました。最近は自分の子供も大きくなってあまり児童文学も読まなくなって、むしろ老人文学の専門家になりました。もっぱら、『癲癇老人日記』というものをやっております。

未明の文学、童話には、私はこれからタッチすることはほとんどなくなっていくのではないかなと思いますが、しかし、先ほど近代の裏日本という言い方が出てきましたけれど、大正期の文学における未明の存在は非常に大きいので、近代日本の近代化していくなかで、今まで光の部分のみスポットが当てられていましたが、まさに裏日本という裏側を未明は見事に文学という形で形象化していたのではないかと思います。その辺をもし時間があるならば、つつきだす様な形での、何らかの仕事をしてみたいと思います。

杉：小埜先生の主催で、今市内で未明文学研究会を毎月開いております。私もそこで毎月勉強させていただいていますが、とっても楽しい会で、皆でいろんなことを学び楽しんでおります。その会はもっと続くと思いますし、その会で色々なことを教えていただいて、自分の書く方でも、とてもとても未明に並ぶというところまで行きませんけれど、もうちょっと読みこんで、少しでも後にくっついていくことができればなと大それたことを思っております。

堀越：その日暮しなんで、なにがどうって分かりませんけど、先程小埜さんに頂いたご本とか、古本屋で復刻版ですが『赤い蝋燭と人魚』とか、これ三百円くらいで売ってました。ゲットしまして読んでみたら、短いから読みやすくておもしろいですよね。復刻版だと古い活字で、独特の味わいがして、僕タバコ吸いませんけど、いい味のたばこを吸っているような、なんともいえない気分がありますよね。また絵を描けって言われたら、いつでも描きたいなと思っています。小埜さんから頂いたエッセイですとか、未明の「私は郷里の人々を好まない」とかね、ハードな言い方ってのは、僕の趣味に合っています。それをちょっと読みたいなと目が醒めたところですのでよろしくお願いいたします。

松本：今、私の母いわさきちひろの評伝を書き始めています。たぶん来年の春ぐらいに脱稿予定で講談社から出します。その中に未明をどう書きこもうかと今考えているところです。どのように書くかまだわかりませんが、出版されたあかつきにはどうぞ買ってください。

宮川：実は昨日分かったのですが、このメンバーの方々は、ほぼ初対面です。杉先生と小埜先生はいつも、お勉強仲間ですけど、だいたい初対面です。小川未明というテーマ、未明文学館創立の十周年ということでお集まりいただきました。今、日本で小川未明の文学について考える時の今日はベストメンバーだと自負しております。みなさんも小川未明、未明文学館十周年のためにここにお集まりくださいまして、一緒に時間を過ごせたことをありがたく思っております。未明を論ずることが風土について考えることだったり、文明について考えることだったり、子供という視点について論ずることだったり、様々なヒントを頂いたと思います。私も未明の童話や小説を読むことを続けたいと思います。みなさんどうもありがとうございました。

パネルディスカッション時の会場の様子